

佐久市文化財調査報告書 第155集

北畑遺跡群

KITAHATA

北畑遺跡 I・II

長野県佐久市桜井北畑遺跡第1・2次調査

北裏遺跡群

KITAUHA

北裏遺跡 I

長野県佐久市伴野北裏遺跡第1次調査

2008. 3

国土交通省関東地方整備局
東日本高速道路株式会社
佐久市教育委員会

佐久市文化財調査報告書 第155集

北畑遺跡群 KITAHAATA

北畑遺跡 I・II

長野県佐久市桜井北畑遺跡第1・2次調査

北裏遺跡群 KITAULA

北裏遺跡 I

長野県佐久市伴野北裏遺跡第1次調査

2008. 3

国土交通省関東地方整備局
東日本高速道路株式会社
佐久市教育委員会



北裏遺跡 I M1号溝址出土「石戈」



北畑遺跡Ⅰ・Ⅱ、北裏遺跡Ⅰオルソ写真
(株) こうそく 撮影・作成



北畑遺跡 I 全景

口絵 4



北裏遺跡 I 全景

例 言

- 1 本書は長野県佐久市に所在する北畑遺跡の第1・2次、北裏遺跡の第1次発掘調査報告書である。
- 2 調査は中部横断自動車道佐久南IC(仮称)建設事業に伴う記録保存調査として実施し、平成17年度は東日本高速道路株式会社、平成18・19年度は国土交通省関東地方整備局からの委託事業として、佐久市教育委員会が実施した。
- 3 遺跡名及び所在地 北畑遺跡Ⅰ・Ⅱ(SKBⅠ・Ⅱ) 佐久市桜井
北裏遺跡Ⅰ(TKUⅠ) 佐久市伴野
- 4 調査期間及び面積 平成17年度(発掘調査) 平成17年10月3日～平成18年3月31日
平成18年度(発掘調査) 平成18年4月18日～平成19年3月22日
平成19年度(整理) 平成19年4月2日～平成20年3月31日
開発面積 25,000㎡ 調査面積 7,070㎡
- 5 当遺跡の発掘調査概要は、佐久市教育委員会文化財課「年報15」・「年報16」でも報告しているが、本書が最終報告である。
- 6 本書に掲載した地図は佐久市発行の都市計画図(1:2,500)、佐久市教育委員会作成の遺跡詳細分布図(1:5,000)である。
- 7 本書で扱っている国家座標は、旧測地系である。
- 8 本遺跡の調査及び報告書作成は小林が行った。
- 9 本書及び発掘調査の図面・写真などの記録および出土遺物は佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡 例

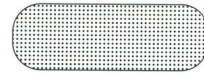
- 1 遺構の略記号は土坑－D、溝址－M、Pit－Pである。
- 2 挿図の縮尺は遺構－1/80、遺物－1/4を基本とする。これ以外のものは、挿図中のスケールを参照されたい。
- 3 遺構の海拔標高は各遺構毎に統一し、水系標高をスケール上に「標高」として記してある。
- 4 土層の色調は1988年版「新版 標準土色帖」に基づいた。
- 5 遺物挿図番号、遺物写真番号、遺物観察表番号は一致する。
- 6 調査区グリッドは公共座標の区割りにしたが、間隔は4×4mに設定した。
- 7 挿図中における網掛は以下の表現である。



地山



赤彩



黒色処理

目 次

□絵 1～4

例言

凡例

目次

第 I 章 発掘調査の経緯	1
第 1 節 調査の経緯	
1 発掘調査に至る経緯	
2 調査体制	
3 調査の経緯	
第 2 節 遺跡周辺の環境	3
1 遺跡の地理的環境	
2 遺跡の歴史的環境	
第 3 節 調査の方法	5
第 4 節 試掘調査	6
第 5 節 基本層序	8
第 6 節 検出遺構・遺物の概要	8
第 II 章 遺構と遺物	9
第 1 節 北畑遺跡 I	9
第 2 節 北畑遺跡 II	28
第 3 節 北裏遺跡 I	35
図版	42

挿図目次

第 1 図	長野県における佐久市の位置	3	第 40 図	D 1 号土坑	28
第 2 図	北畑遺跡 I・II、北裏遺跡 I の位置	3	第 41 図	D 2 号土坑	28
第 3 図	周辺遺跡位置図	4	第 42 図	D 3 号土坑	28
第 4 図	北畑遺跡群試掘トレンチ位置図	6	第 43 図	P 1	28
第 5 図	試掘調査出土遺物	7	第 44 図	遺構外出土遺物 1	29
第 6 図	北裏遺跡群試掘トレンチ位置図	8	第 45 図	遺構外出土遺物 2	30
第 7 図	基本層序模式図	8	第 46 図	北畑遺跡 II 全体図	31
第 8 図	D 1 号土坑	9	第 47 図	M 1 号溝址	36
第 9 図	D 3 号土坑	9	第 48 図	M 1 号溝址出土遺物 1	37
第 10 図	D 4 号土坑	9	第 49 図	M 1 号溝址出土遺物 2	38
第 11 図	D 6 号土坑	10	第 50 図	北裏遺跡 I 全体図	39
第 12 図	D 7 号土坑	10			
第 13 図	D 8 号土坑	10			
第 14 図	D 9 号土坑	10			
第 15 図	D 10 号土坑	11			
第 16 図	D 11 号土坑	11			
第 17 図	D 12 号土坑	11			
第 18 図	D 13 号土坑	12			
第 19 図	D 14 号土坑	12			
第 20 図	D 15 号土坑	12			
第 21 図	D 16 号土坑	12			
第 22 図	D 17 号土坑	12			
第 23 図	D 18 号土坑	12			
第 24 図	D 19 号土坑	13			
第 25 図	D 20 号土坑	13			
第 26 図	D 21 号土坑	13			
第 27 図	D 22 号土坑	13			
第 28 図	D 23 号土坑	13			
第 29 図	M 1 号溝址	14			
第 30 図	M 2 号溝址	14			
第 31 図	M 3 号溝址	15			
第 32 図	M 4 号溝址	16			
第 33 図	P 37	16			
第 34 図	P 39	16			
第 35 図	遺物包含層出土石器	16			
第 36 図	遺物包含層	17			
第 37 図	遺物包含層出土土器	18			
第 38 図	遺構外出土遺物	19			
第 39 図	北畑遺跡 I 全体図	21・22			

付表目次

第 1 表	出土遺物一覧表 1 (SKB I)	23
第 2 表	出土遺物一覧表 2	24
第 3 表	出土遺物一覧表 3	25
第 4 表	出土遺物一覧表 4	26
第 5 表	出土遺物一覧表 5	27
第 6 表	D 3 号土坑出土遺物一覧表	32
第 7 表	出土遺物一覧表 1 (SKB II)	32
第 8 表	出土遺物一覧表 2	33
第 9 表	出土遺物一覧表 3	34
第 10 表	M 1 号溝址出土遺物一覧表 1 (TKU I)	40
第 11 表	M 1 号溝址出土遺物一覧表 2	41

第 I 章 発掘調査の経緯

第 1 節 調査の経緯

1 発掘調査に至る経緯

長野県においては、高速道路・新幹線等に係わる埋蔵文化財保護は、長野県教育委員会が対応し、発掘調査は長野県埋蔵文化財センターが実施してきたが、今回の調査部分は仮称佐久南 IC 料金所から国道 142 号線間であり、本線部分ではないことから、長野県教育委員会・東日本高速道路株式会社・佐久市教育委員会間の協議の結果、佐久市教育委員会が東日本高速道路株式会社の委託を受け調査を実施することとなった。対象地内の試掘調査を平成 17 年 8 月 17 日～9 月 5 日にかけて行った結果、北畑遺跡、北裏遺跡内の 3 ヶ所で遺跡の存在が確認されたため、同年 10 月 3 日から北畑遺跡 I の本調査をおこなった。

平成 18 年度は事業が国土交通省関東地方整備局の管轄となったため、同省から委託を受け北畑遺跡 II・北裏遺跡 I の調査を 6 月 13 日から行い、引き続き平成 19 年度に発掘調査の整理と報告書の作成を行った。

2 調査体制

平成 17 年度

調査主体者	佐久市教育委員会	教育長	三石 昌彦 (5 月 18 日就任)
事務局	教育次長	柳沢 健一	
	文化財課長	中山 悟	
	文化財調査係長	高柳 正人	
	文化財調査係	林 幸彦 須藤 隆司 小林 眞寿 羽毛田卓也	
		富沢 一明 上原 学 赤羽根太郎 (4 月～9 月)	
		神津 格 (10 月～)	出澤 力

平成 18 年度

調査主体者	佐久市教育委員会	教育長	三石 昌彦
事務局	社会教育部長	柳沢 義春	
	文化財課長	中山 悟	
	文化財調査係長	高柳 正人	
	文化財調査係	林 幸彦 須藤 隆司 小林 眞寿 羽毛田卓也	
		富沢 一明 上原 学 神津 格 出澤 力	

平成 19 年度

調査主体者	佐久市教育委員会	教育長	木内 清
事務局	社会教育部長	柳沢 義春 社会教育次長	山崎 明敏
	文化財課長	中山 悟 (4 月～6 月)	森角 吉晴 (7 月～)
	文化財調査係長	三石 宗一	
	文化財調査係	林 幸彦 須藤 隆司 小林 眞寿 羽毛田卓也 富沢 一明	
		上原 学 神津 格 出澤 力 並木 節子 (10 月から)	

調査体制

調査担当者	小林 眞寿		
調査員	佐々木宗昭 堀 益子 赤羽根充江 甘利 隆雄		
	有賀 晴美 岩崎 重子 上原 幸子 碓氷 知子		
	臼田 真杉 江原 富子 小幡 弘子 柏木 貞夫		
	柏木 義雄 加藤 信一 菊池 喜重 小林喜久子		
	小林 幸子 小林百合子 小林よしみ 小山 功		
	斉藤 恵季 佐藤志げ子 島田 幹子 清水 澄生		

清水 美恵	大工原達江	高橋 好春	田中ひさ子
中島とも子	中島フクジ	橋詰 勝子	橋詰 信子
花岡美津子	林 美智子	比田井久美子	堀籠 滋子
宮川百合子	武者 幸彦	百瀬 秋男	柳沢千賀子
山田 和子	山本 徳明	山本有美子	依田 三男
渡邊久美子	渡辺 長子		

3 調査の経緯

平成 17 年度

平成 17 年

10月 3日 重機による表土除去等開始。
 10月 13日 現場仮設プレハブ・トイレの設置。機材の搬入開始。
 10月 14日 機材搬入終了。
 10月 17日 測量基準点の設定。調査員による発掘調査開始。
 10月 21日 重機による表土除去等終了。
 11月 7日 11月 5・6日の週末に現場仮設プレハブに泥棒が侵入。窓ガラス 1 枚破損、時計等が盗まれたため、警察に連絡し、現場検証・被害届の提出を行うも、未解決。窓ガラスの修理を行う。
 11月 8日 未設定部分の測量基準点を設定する。
 11月 22日 発掘調査と並行し、空中写真測量の準備を開始する。
 11月 23日 現場での調査終了。
 11月 24日 機材の搬出開始。リース機材の返却。室内での遺物洗浄・注記・接合・復元、測量図面の写真等の整理作業開始。
 11月 25日 機材の搬出終了。出土遺物の洗浄継続。
 11月 26日 空中写真測量のための、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行う。
 12月 1日 県教育委員会に発掘調査終了届を提出。
 12月 2日 警察に遺失物拾得届を提出。

平成 18 年

2月 27日 空中写真・空中写真測量図が納品される。
 3月 11日 平成 18 年度調査予定の、北畑Ⅱの重機による表土除去を開始する。
 3月 31日 今年度の調査を終了する。

平成 18 年度

平成 18 年

5月 30日 測量基準点の設定開始。
 6月 13日 現場仮設プレハブ・トイレの設置。機材の搬入開始。
 6月 14日 調査員による発掘調査開始。
 6月 16日 測量基準点の設定終了。
 6月 19日 北裏遺跡Ⅰの重機による表土除去開始。
 7月 10日 北畑遺跡Ⅱ現場調査終了。北裏遺跡Ⅰ重機による表土除去終了。
 7月 19日 北畑遺跡Ⅱラジコンヘリコプターによる空中写真撮影。
 7月 20日 北畑遺跡Ⅱ埋め戻し開始。
 8月 19日 埋め戻し終了。
 8月 28日 北裏遺跡Ⅰ。調査員による発掘調査開始。測量基準点設定開始。
 9月 8日 中込中学校生 2 名職場体験。
 9月 21日 溝址覆土より石戈出土。測量基準点の設定終了。
 10月 4日 現場での調査終了。機材の搬出。

- 10月 5日 室内での遺物洗浄・注記・接合・復元、測量図面の写真等の整理作業。
- 10月10日 北裏遺跡Ⅰラジコンヘリコプターによる空中写真撮影。
- 10月11日 県教育委員会に発掘調査終了届、警察に遺失物拾得届を提出。
- 10月24日 北裏遺跡Ⅰ埋め戻し開始。
- 11月28日 埋め戻し終了。
- 平成19年
- 3月 2日 変更契約。
- 3月22日 本年度の調査を終了する。
- 平成19年度
- 平成19年
- 4月 2日 出土遺物、記録の整理。報告書の作成。
- 平成20年
- 3月31日 すべての調査・作業終了。報告書刊行。



第1図 長野県における佐久市の位置

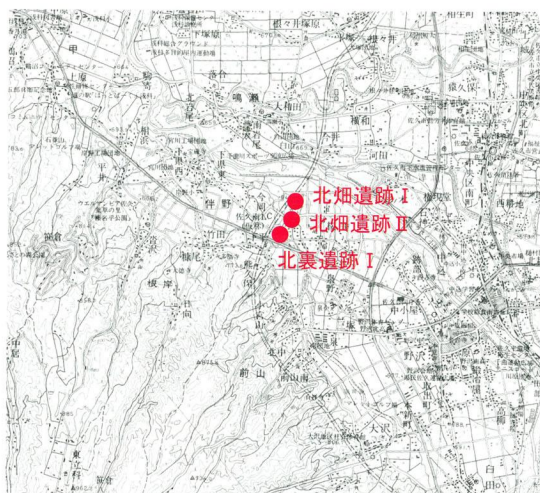
第2節 遺跡周辺の環境

1 遺跡の地理的環境

佐久市は長野県の東部に位置し、日本で最も海から遠い地点が市内に存在する。今回調査を行った3遺跡は市内を南北に走る千曲川の左岸、通称川西地域の中央平地に存在する。地形的には沖積氾濫原、地質的には沖積層の上に遺跡は立地している。局所的に見てみると、3遺跡共に片貝川の形成した河岸段丘上に位置しており、遺跡の存在する面は片貝川の氾濫原である。遺跡が営まれた頃には流水があったものと思われる。現状の片貝川は決して大きな河川ではないが、遺跡の状況からは今よりも大きな河川であったことは明らかであろう。

標高的には650m台の前半であり、北畑遺跡群の存在する片貝川右岸も、北裏遺跡群の存在する片貝川左岸もほぼ平坦であるが、北畑遺跡群は南から北に向かい、北裏遺跡群は西部山地の縁辺を形成する段丘をのぞいた、中央平地部分は東南から西北に向かい極めて緩やかに傾斜している。

土質的には、北畑遺跡群は礫質褐色低地土壌（畑地部分）、礫質灰色低地土壌（水田部分）であり、北裏遺跡群は細粒灰色低地土壌（水田部分）である。植生是水田雑草群落と畑の雑草群落が混在する。



第2図 北畑遺跡Ⅰ・Ⅱ、北裏遺跡Ⅰの位置（1:10,000）

2 遺跡の歴史的環境

北畑遺跡群、北裏遺跡群共に過去の調査事例はほとんどない。数少ない調査は国道142号線の拡幅に先立ち実施された試掘調査や、その結果行われた発掘調査である。しかし、これらの調査は現在継続中であり、本報告はされていない。

北畑遺跡は沖積氾濫原に立地しており、集落の主体部分は微高地を呈する現集落下に存在するものと思われる。今回の調査で出土した土器や、既出遺物・伝承等から時代の上限は縄文時代前期まで遡る可能性が高く、下限は中世室町時代頃であることが、国道142号線拡幅工事ともなう発掘調査で明らかになった。

「旧桜井新田村誌」によれば、桜井地域は古くから度重なる洪水被害を受けていたことが知れ、現北桜井集落が安永年間に洪水の被害から、中河原地籍から全村移住した事実からも、原始・古代の遺跡が水害により消滅した可能性も禁じえない。

八幡一郎「南佐久郡の考古学的調査」に桜井村町田四十八塚附近の水田中より、明治二十二年頃出土せるが・と

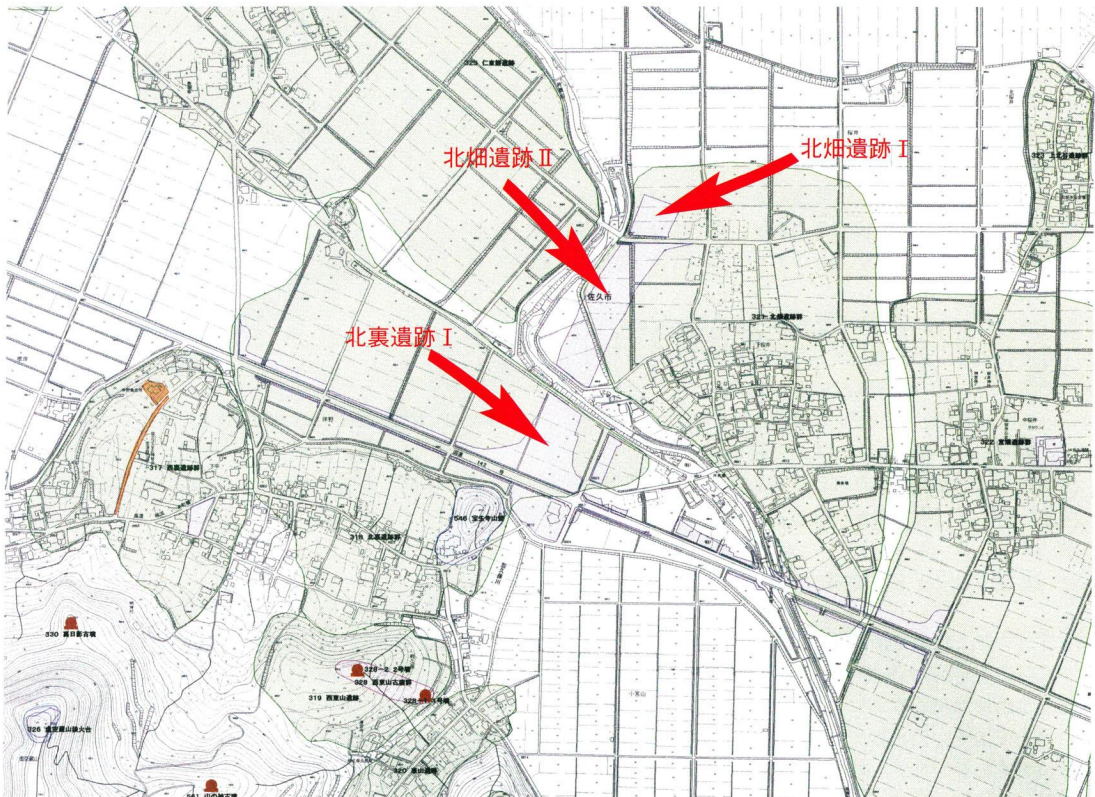
紹介されている学史上有名な弥生土器も、北畑遺跡群から出土したものかも知れない。弥生時代中期前半以前のものであろう特異な形状の土器である。近年の試掘調査等から、片貝川流域の弥生文化発生時期が佐久地域のなかでも古い時期である可能性が見受けられることから、本資料が北畑遺跡群から出土したとしても不自然ではない。

北畑遺跡群の西方に片貝川を挟んで立地する二東餅遺跡は、中部横断道の建設に先立ち長野県埋蔵文化財センターが調査を実施したが、遺跡の存在は確認されなかった。極めて少量ではあるが、土器の散布が認められ、昭和40年代の圃場整備の際にも多量の土器が出土したという伝承もあるが、遺跡東端部分を南北に貫いた中部横断道の道路敷部分には遺跡の痕跡すら認められなかった。まさに片貝川の段丘に立地した調査部分は、前記した洪水により原始・古代の人々の生活の痕跡は跡形もなく消滅したとも考えられる。

北裏遺跡群の南方には「虚空蔵山狼煙台」と呼ばれる山城が、また北裏遺跡群内にも、南東隅に「宝生寺山砦」と呼ばれる中世城郭が存在する。佐久地域は中世城郭の数が極めて多いが、甲斐武田氏の侵略に対した結果としてのものもあろうが、群雄割拠した地元豪族の力関係によるところも大きいのではなからうか。

時代は前後するが、虚空蔵山狼煙台の北斜面や東斜面上の狭小な平坦面には、横穴石室を持たない古墳が構築されている。近年の遺跡詳細分布調査で明らかとなったこのような立地の古墳は、佐久市の通称「西山」地域の山腹斜面にまんべんなく構築されていることが明らかとなった。これまで不明瞭であった佐久地域の前期・中期の古墳の様相がこれらの古墳の調査により明らかとなる。

北裏遺跡群の西方に位置する西裏遺跡群は今回の調査地周辺で唯一発掘調査事例が報告されている。昭和60年に調査された「西裏・竹田峯遺跡」がそれであり、弥生時代中期後半～後期の集落址が検出されている。おそらくは、北裏遺跡群の現行水田地帯は、弥生時代以降西裏遺跡群や北裏遺跡群の水田地帯南方の台地上の集落の人々により開発された水田が展開していたものと推測される。



第3図 周辺遺跡位置図

第3節 調査の方法

遺跡名・調査区

平成17年の試掘調査結果により確定した調査範囲を、佐久市遺跡詳細分布図の遺跡に照らし合わせ、北から南に向かい、北畑遺跡Ⅰ、北畑遺跡Ⅱ、北裏遺跡Ⅰに区分した。北畑遺跡ⅠとⅡの区分は、調査年度の違いを表す。つまり、Ⅰ＝1次調査、Ⅱ＝2次調査の意味である。

この調査区を網羅するように、4×4mのグリットを最小単位とし、国家座標に沿って40m×40mの区画を設定した。この40mの区画は北東隅を起点に西方向にア、イ、ウ、エ・・・南方向に1、2、3、4・・・とグリット単位に記号をふり、各グリットの南西隅をグリット名とした。

遺跡略記号・遺構略記号

遺跡略記号は北畑遺跡ⅠはSKBⅠ、北畑遺跡ⅡはSKBⅡ、北裏遺跡ⅠはTKUⅠである。これは以下の決まりにより付けられるもので、佐久市内の遺跡略記号はこれに従い付けられている。

- アルファベット3文字の先頭は旧大字のローマ字表記の頭文字である。 S=桜井、T=伴野
- アルファベット3文字の2番目は遺跡名のローマ字表記の頭文字である。 K=K I T A
- アルファベット3文字の3番目は遺跡名のローマ字表記の任意の文字である。 B=B A T A K E、U=U R A
- 末尾のローマ数字は発掘調査回数を表す。 I=1回目(1次)、Ⅱ=2回目(2次)

遺構略記号は以下のとおりであり、佐久市共通である。

- H=住居址(基本的に竪穴住居址であり、現在のところ佐久市内では明確な平地住居は確認されていない。)
- F=掘立柱建物址
- D=土坑(陥穴、貯蔵穴等)
- P=ピット(基本的には柱状のものを建てたと思われる、多くは小径の掘り込み)
- M=溝址(環濠、水路等)
- T a = 中世の竪穴状遺構

遺構調査

土坑は長径方向に沿って2分割し、半裁により土層の観察・記録を行った後完掘した。遺物は半裁された区を東西南北の英語頭文字を区として取り上げた。

ピットも土坑と同様であるが、遺物はピットの遺構ナンバーで一括した。

溝址は短辺方向に任意の場所で区分し、土層を観察・記録した。遺物は区毎に取り上げた。

遺物包含層の遺物はすべて通し番号を付け3次元の位置を記録した。

遺構測量

グリット杭を基準とした、簡易遣り方測量である。

写真

現場での写真はデジタル一眼レフカメラと、35mmフィルム一眼レフカメラによるカラーリバーサルで同一写真を各々撮影した。遺物写真はデジタル一眼レフカメラで行い、データの状態で報告書に使用した。

空中写真撮影・測量

ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を3ヶ所すべてで行い、最終的に簡易デジタルオルソによる合成写真を作成した。測量は北畑遺跡Ⅰのみ実施した。

遺物の整理等

遺物洗浄は竹ブラシを用い手で行い、室内で自然乾燥させた。注記は白色のポスターカラーにより行い、薄めたラッカーをその上から塗布した。遺物の接合にはセメダインCを用いた。遺物復元の際の充填材にはエポキシ系樹脂を用いた。遺物実測・拓本は手取りで行った。最終的な遺物の保管に際しては、報告書を台帳として、報告書掲載遺物と未掲載遺物に区分し、コンテナに分類ラベルを貼り収蔵庫に収納した。

報告書

報告書はマイクロソフト社製「エクセル」、ジャストシステム社製「一太郎」、アドビ社製「フォトショップ」と「イラストレーター」のソフトウェアにより作成し、入校、印刷した。(図面はすべてデジタルトレースを行い、写真もデータで版組したため、紙での原稿は作成していない。)

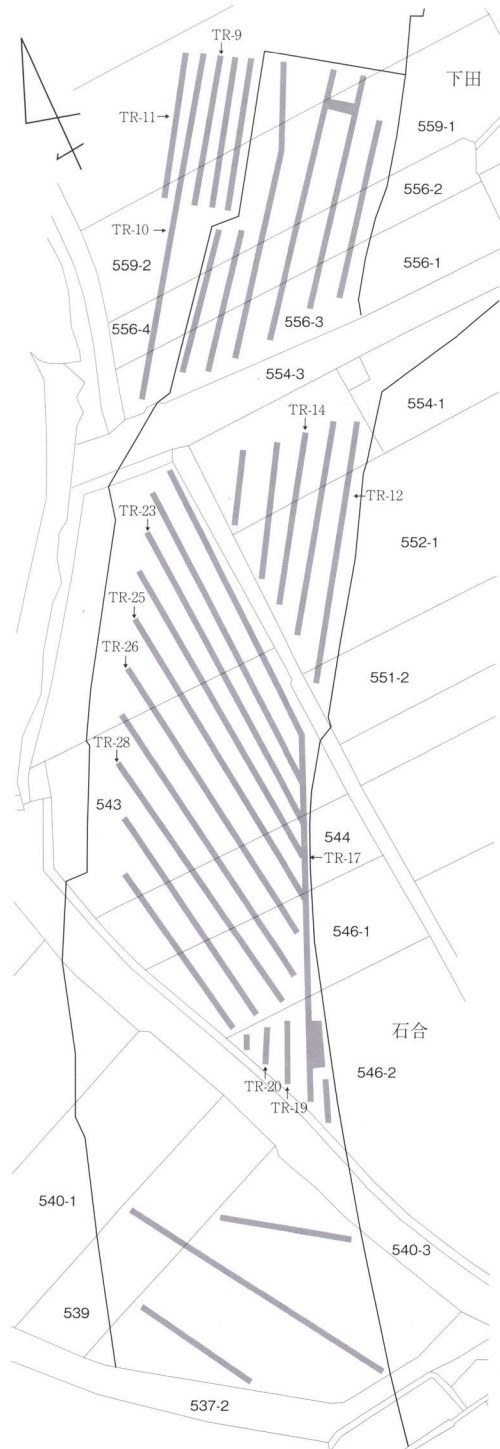
第4節 試掘調査

試掘トレンチの位置と出土した遺物を、第4図～6図に示した。遺物が検出されたものの本調査を実施しなかった部分は、昭和40年代の圃場整備時に移動された土砂内より遺物が出土したり、旧地形が掘削され残存していない事による。

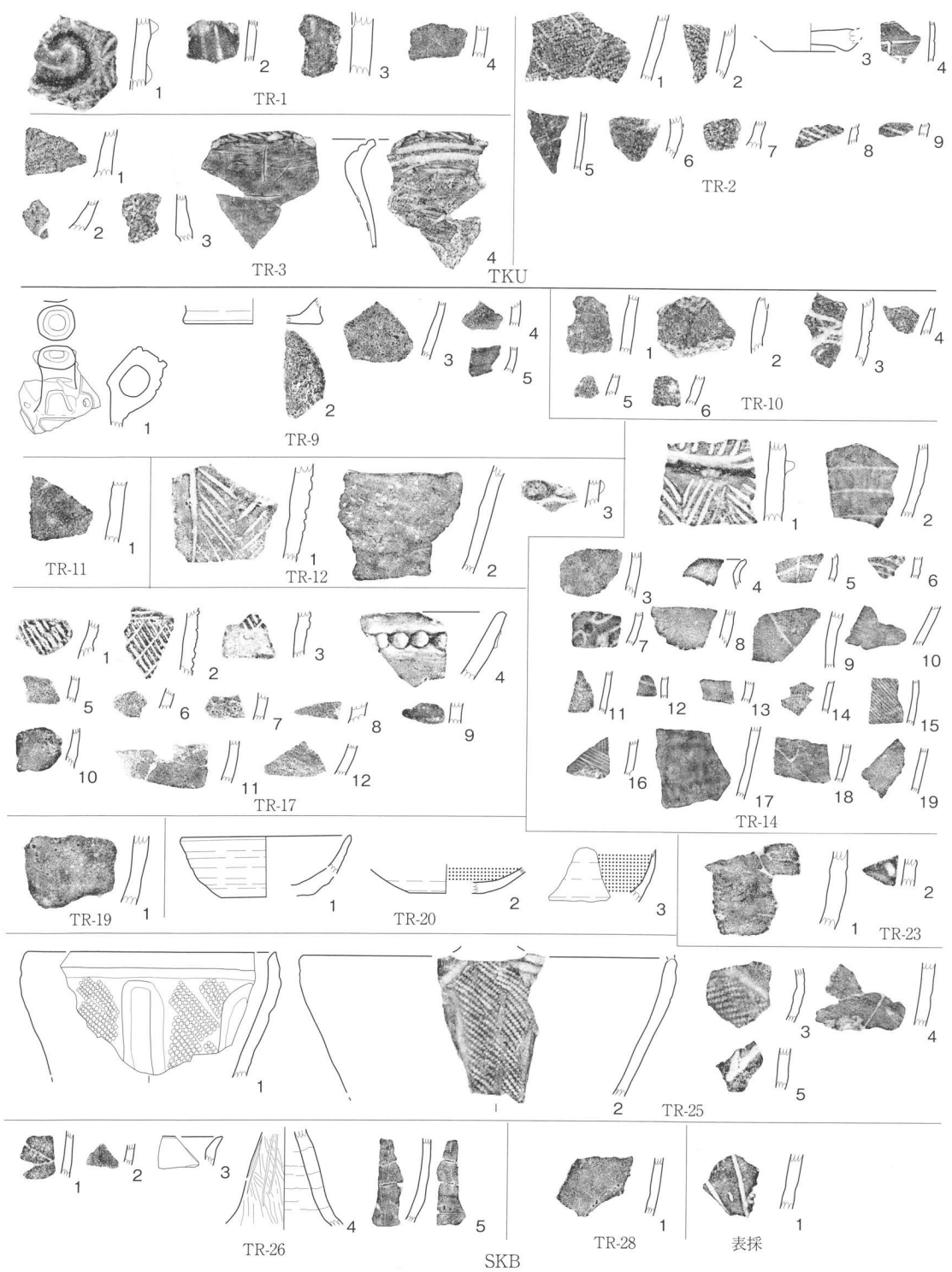
試掘調査による出土遺物は縄文時代前期から平安時代に及んでおり、本調査時の出土遺物と同様であるが、本調査時においては該当する時代の遺構が検出されなかった時期も認められる。しかし、出土した遺物には顕著な摩耗は認められないものも多いことから、現集落に重なる部分に遺跡の中心部分が存在するものと推測された。また、遺構に伴わずに出土した土器すべてが、自然の力により移動したとは考えにくく、特に、北畑遺跡Ⅱで出土した平安時代の土師器碗・坏については状態が良いことから、掘り込み等の遺構は持たないものの、人為的にそこに置かれた可能性を強く感じたが、その位置付けは困難であった。

北裏遺跡群のTR-3から出土した壺の口縁部片については、縄文晩期ないしは弥生前期のものと思われるが、該期の遺構・遺物は本調査では検出されなかった。今回の調査では範囲外であった、調査地南方に存在する台地上の調査が、中部横断道の建設に伴い予定されており、該期遺跡の発見が期待される。

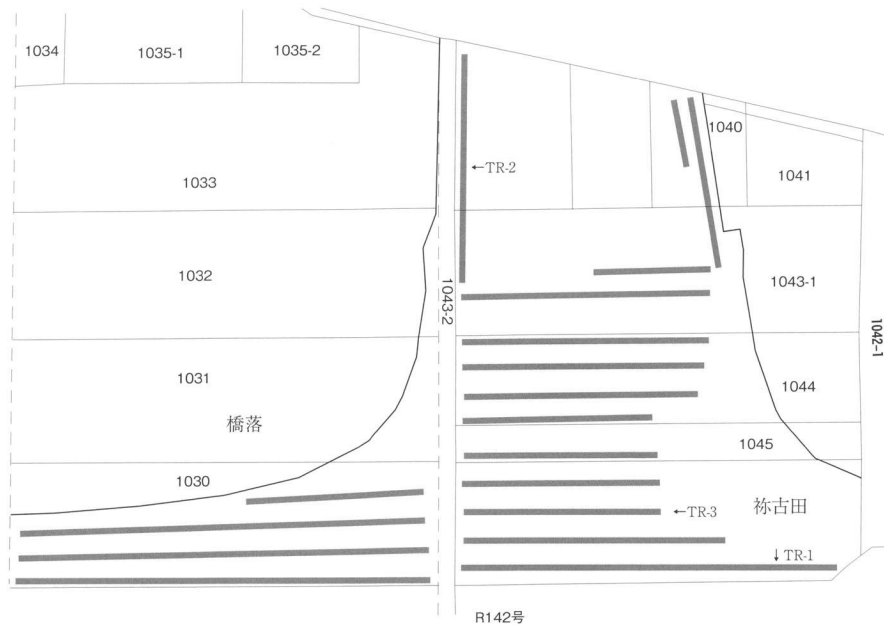
桜井地域は、江戸時代の文献等にも度重なる洪水被害が記録されている。今回の調査地に隣接するかのよう流れる片貝川、やや離れた北方を流れる千曲川の2河川の氾濫が、この地に与えた度重なる被害の痕跡は、試掘調査でも明瞭に台地に刻まれていた。特に片貝川の氾濫は、現状の片貝川の規模からは想像できないほど広範囲に及んでおり、これにより消滅した遺跡が存在しても不思議ではないほどである。本来ならば、遺跡の立地条件としては最良であるべき河岸段丘縁に集落が成立し得なかったのは、片貝川の氾濫がもたらす災害によるものであろう。反面、このような不安定な場所（集落の周辺で、農業などの生産活動や墓域に適さない場所）が原始・古代の人々にどのように認識され、何に利用されていたのかを解明することは、原始・古代集落の範囲の捉え方について極めて重要な問題を提起しているように思われる。



第4図 北畑遺跡群試掘トレンチ位置図



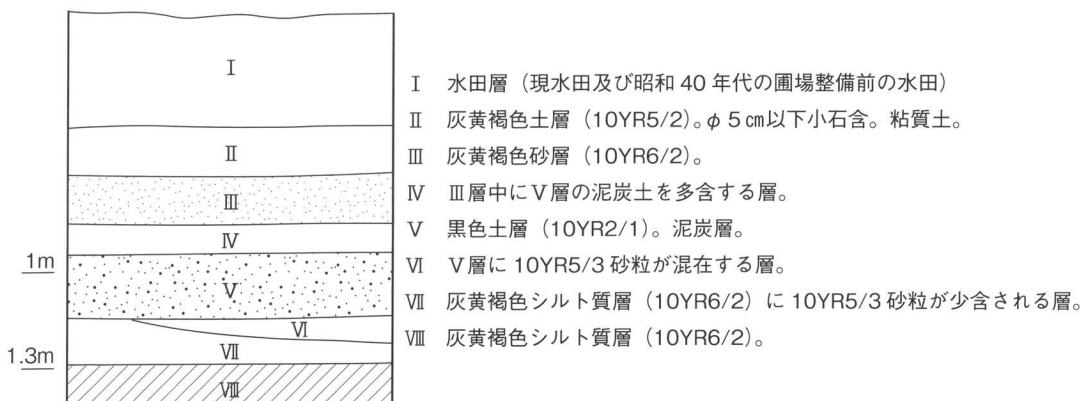
第5図 試掘調査出土遺物



第6図 北裏遺跡群試掘トレンチ位置図

第5節 基本層序

基本層序は、北畑遺跡Ⅰが下図のとおりである。Ⅳ～Ⅵ層が遺物包含層であり、Ⅶ層上面が遺構検出面であるが、遺構の把握が困難であったため、Ⅷ層上面で行った。北畑遺跡Ⅱでは、Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅶが存在せず、Ⅱ層中に含まれる石が、北畑遺跡Ⅰに比べ、大きい。また、Ⅵ層中にも多量の礫が混入する。北裏遺跡ⅠはⅠ・Ⅵ・Ⅷ層で構成される。北畑遺跡Ⅱ、北裏遺跡Ⅰの場合、Ⅷ層を浸食し堆積した片貝川の氾濫河床が存在する。



第7図 基本層序模式図

第6節 検出遺構・遺物の概要

北畑遺跡Ⅰ

○遺構 土坑－21、溝址－4、Pit－71、遺物包含層－1

- 遺物 土器（縄文・弥生・土師器・須恵器）、石器（打製石斧・打製石鏃等）
- 北畑遺跡Ⅱ
- 遺構 土坑－3、Pit－1
- 遺物 土器（縄文・弥生・土師器・須恵器）、石器（打製石斧・凹石・砥石等）
- 北裏遺跡Ⅰ
- 遺構 溝址－1
- 遺物 土器（弥生）、石器（石戈・打製石斧・磨製石斧等）

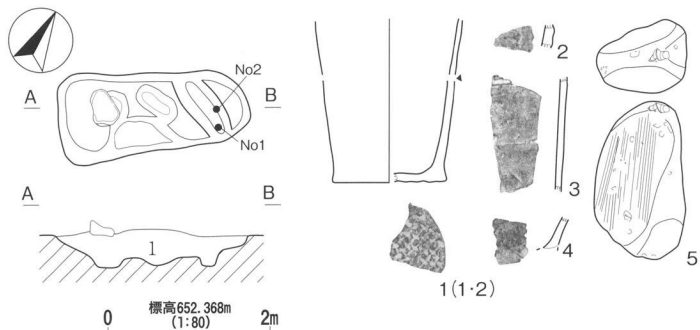
第Ⅱ章 遺構と遺物

第1節 北畑遺跡Ⅰ

○D1号土坑

オ6グリットで検出された。他遺構との重複関係は有さない。不整な長方形の平面形態を呈し、断面は乱れた鍋底である。長軸方位をN-57°-Eにとり、長軸長-2.28m、短軸長-0.92m、深度-0.4m、面積-2.16㎡の規模である。

出土遺物は縄文時代後期前半の深鉢片が4点と、磨石が1点出土している。文様部分が残存しないため、判断としないが「堀之内Ⅱ式」に位置付けられようか。性格は不明である。



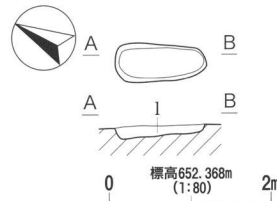
1.黒色土層(10YR1/2)粘質土。7.5YR6/6鉄分ブロック少含。

第8図 D1号土坑

○D3号土坑

カ4グリットで検出された。他遺構との重複関係は有さない。楕円形の平面プランを呈し、断面は逆梯形である。長軸方位をN-30°-Wにとり、長軸長-1.12m、短軸長-0.44m、深度-0.12m、面積-0.44㎡の規模である。

出土遺物は皆無であり、時期性格共に不明である。



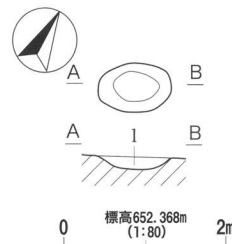
1. 灰黄褐色土層(10YR5/2)7.5YR5/6鉄分ブロック含む。

第9図 D3号土坑

○D4号土坑

オ5グリットで検出された。他遺構との重複関係は有さない。楕円形の平面プランを呈し、断面は鍋底状を呈する。長軸方位をN-11°-Wにとり、長軸長-0.88m、短軸長-0.6m、深度-0.12m、面積-0.44㎡の規模である。

出土遺物は皆無であり、時期性格共に不明である。



1. 灰黄褐色(10YR5/2)7.5YR6/6鉄分ブロック含む。

第10図 D4号土坑

○D6号土坑

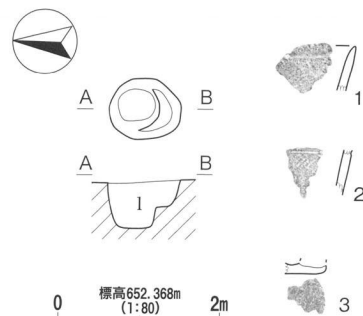
キ3グリットで検出された。他遺構との重複関係は有さない。楕円形の平面プランを呈し、南に1段のテラスが形成された、所謂2段落ちの断面形状を呈するが、基本的には逆梯形である。長軸方位を真北にとり。長軸長-0.88m、短軸長-0.72m、深度-0.45m、面積-0.45㎡の規模である。

出土遺物は、縄文時代後期前半と思われる深鉢片が3点認められる。1は口縁部、2は体部、3は底部片であり、それぞれ部位は異なり、接合点は認められないが、同一個体の可能性が高い。文様は1には口縁部下を巡る平行沈線、3に平行沈線と粒の細かいR L縄文が縦位に施されている。性格は不明である。

○D7号土坑

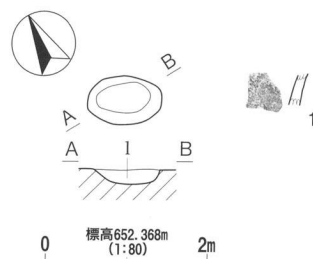
キ3グリット、D6号土坑の東隣で検出された。他遺構との重複関係は有さない。楕円形の平面形状を呈し、断面は鍋底状である。N-60°-Wに長軸方位をとる。長軸長-0.88m、短軸長-0.60m、深度-0.16m、面積-0.41㎡の規模である。

出土遺物は縄文時代後期と思われる、深鉢片が1点出土している。無文の細片であるため、詳細な時期は性格と共に不明である。



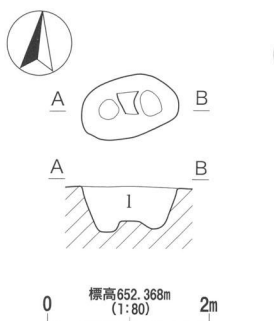
1. 褐灰色土層 (10YR5/1) 砂質土。

第11図 D6号土坑



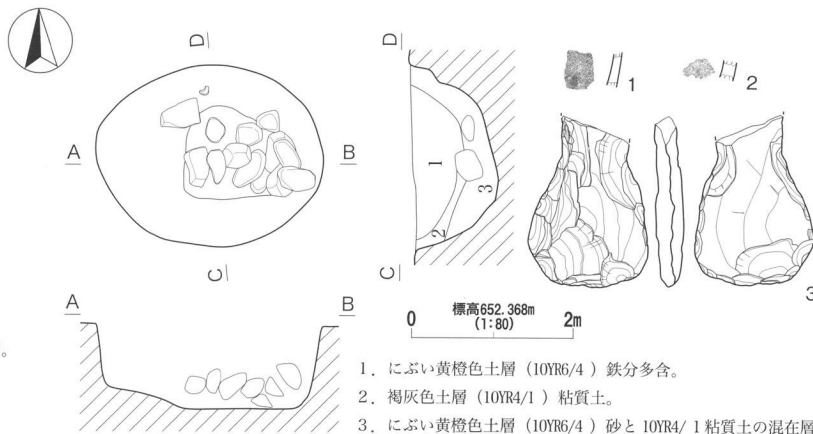
1. 褐灰色土層 (10YR5/1) 砂質土。

第12図 D7号土坑



1. 褐灰色土層 (10YR4/1) 砂層。

第13図 D8号土坑



1. にぶい黄橙色土層 (10YR6/4) 鉄分多含。

2. 褐灰色土層 (10YR4/1) 粘質土。

3. にぶい黄橙色土層 (10YR6/4) 砂と 10YR4/1 粘質土の混在層。

第14図 D9号土坑

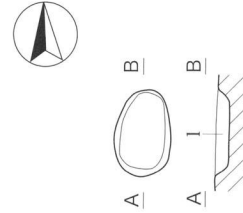
○D9号土坑

キ・ク5グリットにまたがって検出された。他遺構との重複関係は有さない。楕円形の平面プランを呈し、断面は長軸方向は逆梯形であるが、短軸方向は鍋底である。N-80°-Wに長軸方位をとる。長軸長-2.8m、短軸長-2.2m、深度-1.0m、面積-4.77㎡の規模である。底面東に偏って、大きな礫が13個組置かれていた。この中の3個には磨られた痕跡が認められた。

出土遺物には基部を欠損した打製石斧1点と、無文の縄文土器深鉢片2点が認められる。縄文土器は後期の所産と思われる。打製石斧の刃部は滑らかに摩滅しており、使い込まれている。土坑の性格は不明である。

○D10号土坑

ク5グリットで検出された。他遺構との重複関係は有さない。楕円形の平面形態で、断面は逆梯形である。N-7°-Eに長軸方位をとり、長軸長-1.02m、短軸長-0.68m、深度-0.14m、面積-0.59㎡の規模である。出土遺物は皆無であり、時期・性格共に不明である。



0 標高652.368m (1:80) 2m

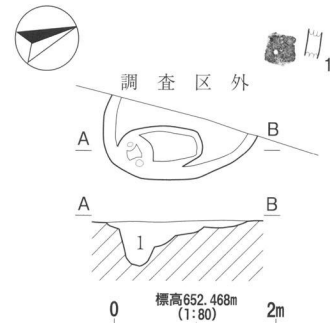
1. 灰黄褐色土層 (10YR5/2) 砂質土。

第15図 D10号土坑

○D11号土坑

ケ3グリットで検出された。D20号、D21号土坑を切る。調査区外にのびるため、平面形態は不明である。深度は0.52mを測る。

土師器と思われる細片が1点出土しているが、時期・性格共に不明である。



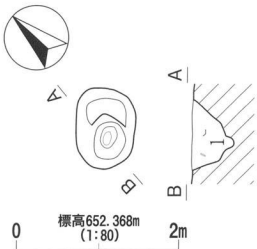
1. 暗褐色土層 (10YR3/4) 砂質土。

第16図 D11号土坑

○D12号土坑

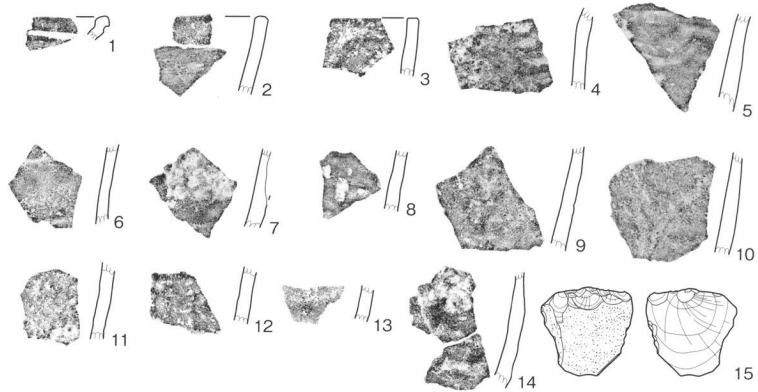
ク7、ケ7グリットにまたがって検出された。他遺構との重複関係は有さない。楕円形の平面形態を呈し、断面は北にテラスを形成する所謂2段落ちであるが、基本的には逆梯形である。N-49°-Eに長軸方位をとり、長軸長-0.96m、短軸長-0.72m、深度-0.52m、面積-0.62㎡の規模である。

出土遺物としては、同一個体と思われる13片の無文の縄文土器片、口縁部に沈線が横走る縄文土器片1片の計14片と、溶結凝灰岩の削器1点が出土している。時期的には、1の縄文土器片の口縁部の沈線の存在から後期「堀之内I式」期の所産と考えられる。性格は不明である。



1. 褐灰色土層 (10YR5/1) 粘質土。土器含む。

第17図 D12号土坑



○D13号土坑

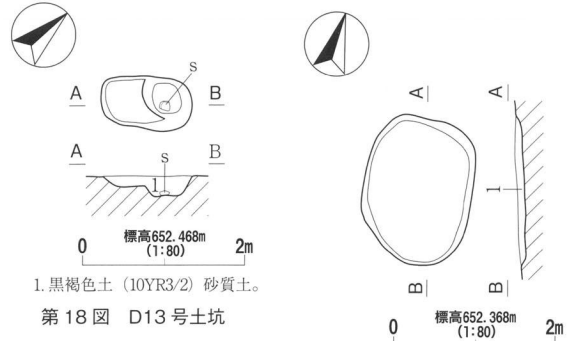
サ7グリットで検出された。他遺構との重複関係は有さない。楕円形の平面プランを呈し、断面は所謂2段落ちであるが、基本的には逆梯形である。N-47°-Eに長軸方位をとる。長軸長-1.12m、短軸長-0.72m、深度-0.24m、面積-0.65㎡の規模である。

出土遺物は皆無であり、時期・性格共に不明である。

○D14 号土坑

ケ8・9グリットにまたがって検出された。他遺構との重複関係は有さない。楕円形の平面プランを呈し、逆梯形の断面形態である。N-4°-Wに長軸方位をとり、長軸長-1.76m、短軸長-1.32m、深度-0.08m、面積-2.05㎡の規模である。

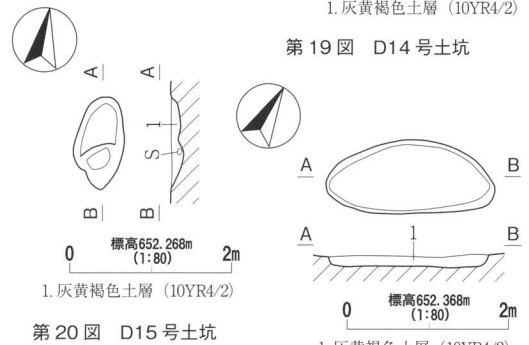
出土遺物は皆無であり、時期・性格共に不明である。



○D15 号土坑

キ7グリットで検出された。不整形な楕円形の平面プランを呈し、断面は鍋底状である。N-11°-Wに長軸方位をとり、長軸長-1.12m、短軸長-0.64m、深度-0.12m、面積-0.49㎡の規模である。

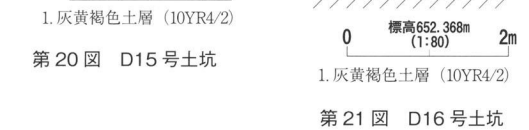
出土遺物は皆無であり、時期・性格共に不明である。



○D16 号土坑

コ7グリットで検出された。楕円形の平面プランを呈し、断面は逆梯形である。N-64°-Eに長軸方位をとり、長軸長-2.08m、短軸長-0.88m、深度-0.16m、面積-1.48㎡の規模である。

出土遺物は皆無であり、時期・性格共に不明である。

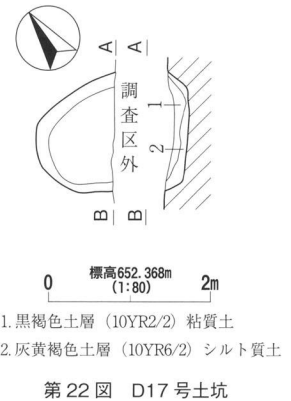


第21図 D16号土坑

○D17 号土坑

オ11グリットで検出された。区域外にのびるため、平断面形態、規模等は不明である。

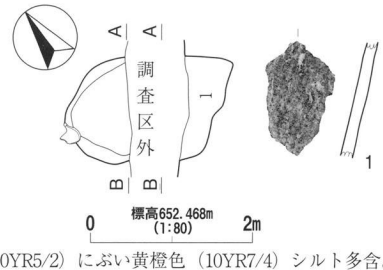
出土遺物も皆無であり、時期・性格共に不明である。



○D18 号土坑

オ11グリットで検出された。区域外にのびるため、平断面形態、規模等は不明である。

出土遺物は弥生土器と思われる破片が1点認められるが、判断できない。性格は不明である。



○D19 号土坑

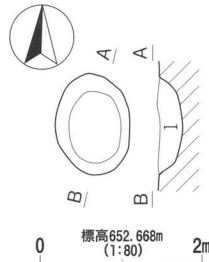
シ15グリットで検出された。楕円形の平面プランを呈する。断面は鍋底状である。N-5°-Eに長軸方位をとり、長軸長-1.24m、短軸長-0.92m、深度-0.28m、面積-0.91㎡の規模である。

出土遺物は皆無であり、時期・性格共に不明である。

○D20 号土坑

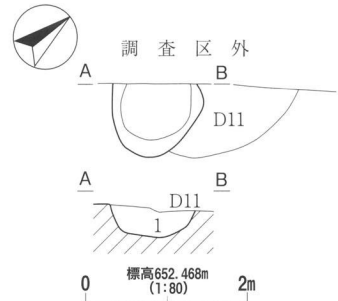
ケ3グリットで検出された。D11号土坑に切られる。調査区域外にのびるため、平面形態、長軸方位、規模等は不明な点が多いが、断面形態は逆梯形、深度-0.32mである。

出土遺物は皆無であり、時期・性格共に不明である。



1. 灰黄褐色土層 (10YR4/2)

第24図 D19号土坑



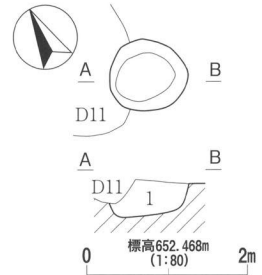
1. 黒褐色土層 (10YR3/1) 鉄分多含。

第25図 D20号土坑

○D21号土坑

ケ3グリットで検出された。D11号土坑に切られる。円形の平面プランを呈し、断面は逆梯形の形態である。N-60°-Wに長軸方位をとり、長軸長-0.96m、短軸長-0.88m、深度-0.36m、面積-0.64㎡の規模である。

出土遺物は皆無であり、時期・性格共に不明である。



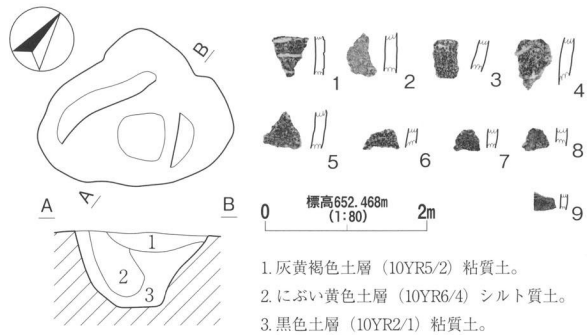
1. 黒褐色土層 (10YR3/1) 鉄分多含。

第26図 D21号土坑

○D22号土坑

キ・ク11グリットにまたがって検出された。不整な、楕円形の平面プランを呈し、逆梯形の断面形態である。N-49°-Eに長軸方位をとる。長軸長-2.4m、短軸長-1.88m、深度-0.92m、面積-3.25㎡の規模を有する。

出土遺物は、縄文土器と思われる破片8点と、内面黒色処理が施される土師器1片である。文様が認められる1は、後期「堀之内Ⅱ式」と捉えられるが、前述した土師器の存在もあり、本址の時期・性格は不明である。



1. 灰黄褐色土層 (10YR5/2) 粘質土。

2. にぶい黄色土層 (10YR6/4) シルト質土。

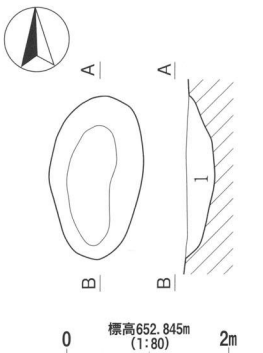
3. 黒色土層 (10YR2/1) 粘質土。

第27図 D22号土坑

○D23号土坑

チ16グリットで検出された。楕円形の平面プランを呈し、断面は鍋底状である。N-5°-Eに長軸方位をとり、長軸長-2.0m、短軸長-1.12m、深度-0.32m、面積-1.73㎡の規模である。

出土遺物は皆無であり、本址の時期・性格は不明である。



1. 黒色土層 (10YR2/1) 砂粒含。

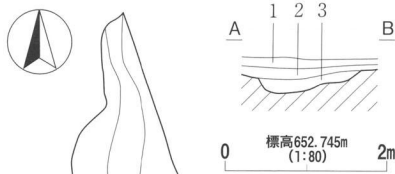
第28図 D23号土坑

○M1号溝址

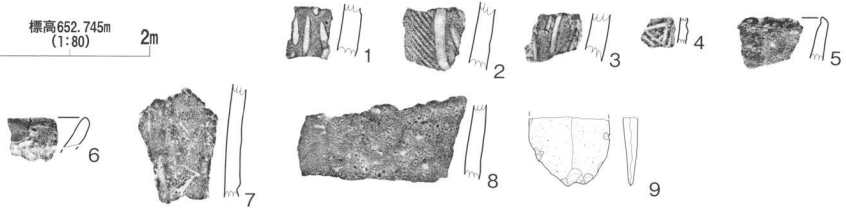
調査区の南西端、ヌ13~17グリットにかけて検出された。調査長-15.24m、最大幅-1.8m、最大深度-0.16mの規模である。基本的に南~北に向かい流れている。

断面形状は基本的には逆梯形であるが、部分的にテラスを有している。自然流路であるのか、人工の溝址であるのかは判然としないが、地山のシルト質土とは明瞭に異なる黒色粘質土が覆土として堆積していた。

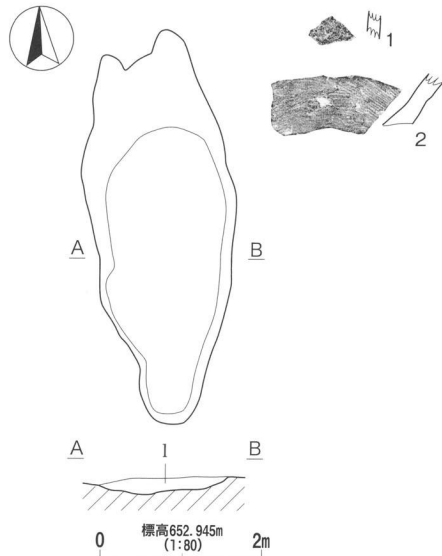
出土遺物としては8片の縄文土器片と1点の溶結凝灰岩製の削器が認められた。縄文土器は、1~3のような中期後半と思われるものや、4~8のような後期前半のものが認められるが、本址の時期を決定づけられるものではない。また、石器も時期比定が可能な特徴を有するものではないため、本址の時期・性格は不明である。



1. 黒色土層 (10YR2/1) 粘質土。
2. 黒色土層 (10YR2/1) 粘質土。シルト質粒子 (10YR5/3) 含む。
3. 黒色土層 (10YR2/1) 粘質土、にぶい黄褐色シルト質土 (10YR5/3) の混在土層。



第29図 M1号溝址



1. 黒色土層 (10YR2/1) 粘質土。

第30図 M2号溝址

○M2号溝址

ナ 15～16 グリットで検出された。M1号溝址の東側を併走する様に展開していたものと推測される。調査長—4.8m、最大幅—1.84m、最大深度—0.2mの規模を有する。断面形状は鍋底で、覆土には黒色粘質土が堆積していた。M1同様に自然流路か人工の溝址かは判然としない。

出土遺物には弥生土器と思われる土器片が2点認められたが、時期・性格共に不明である。

○M3号溝址

ラ 8～タ 17 グリットにかけて検出された。南南東から北北西に向かい流れている。D23号土坑に切れ、両端共に調査区外に

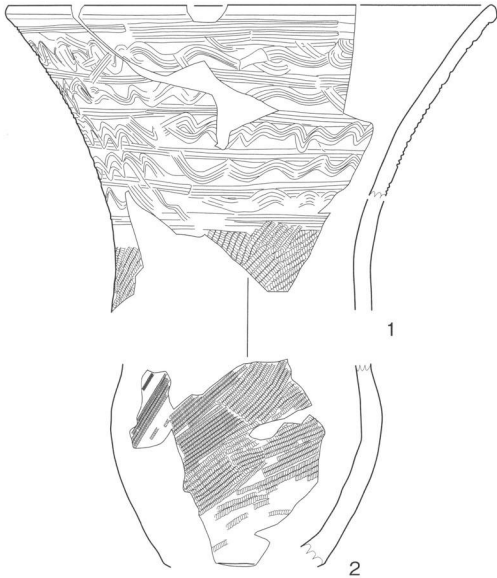
のびている。調査長—34.2m、最大幅—8.6m、最大深度—0.36mの規模を有し、断面形状は逆梯形である。覆土は黒色粘質土の堆積の上に砂層が堆積していた。自然流路か人工の溝址であるかは判然としない。

出土遺物は、調査範囲の南端よりで出土した縄文時代前期の土器2点のみである。この2点の土器は、接合点は認められないが同一個体であり、「諸磯a式」に比定される。溝址底面に密着した状態で出土した一括資料であり、本址の年代もほぼ同時期と捉えられよう。性格は不明である。

○M4号溝址

ツ 8グリットで検出された。調査区外にのびるため、他遺構との重複関係、規模は不明である。調査範囲内での最大深度は0.36mであった。

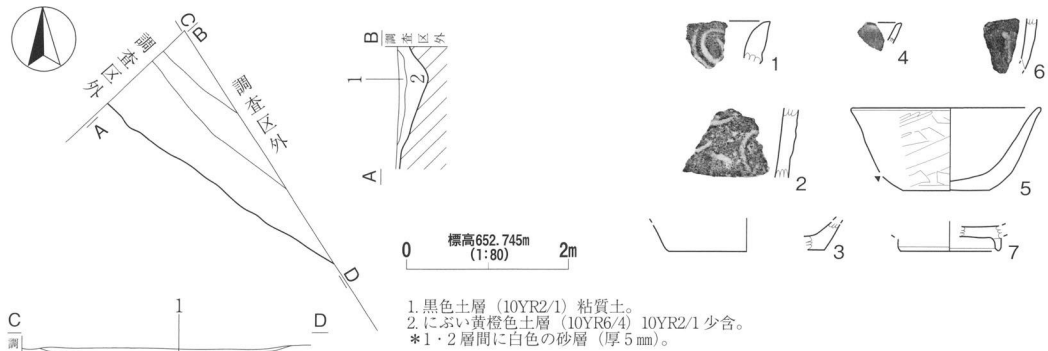




第31図 M3号溝址

調査区域外

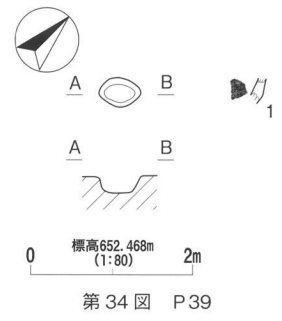
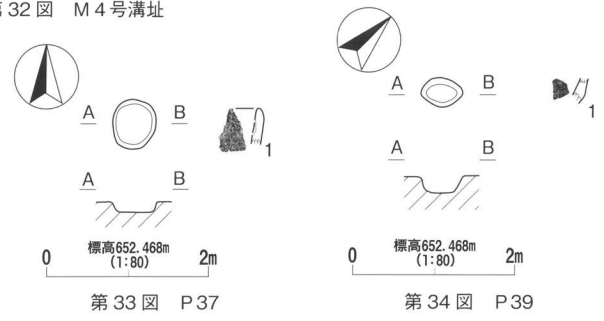
出土遺物は縄文時代後期の土器と思われる1・2、土師器3～5、灰釉陶器7の7点が認められる。土師器4は古墳時代中期、5は奈良時代に比定されるが、他は時期不明である。灰釉陶器は大原2号窯式と思われる。本址の時期性格は不明である。



第32図 M4号溝址

○Pit

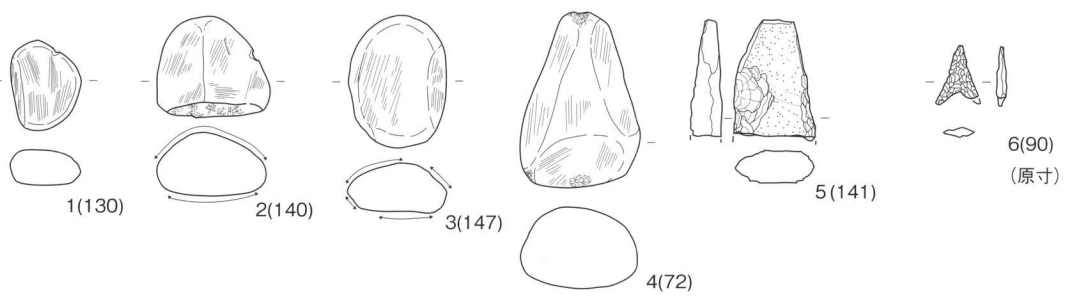
ピットは総数71基が検出された。この内、遺物が出土したものはP37、P39の2基のみであり、P37はケ7、P39はコ7グリットで検出された。出土した遺物は2基共に1片の土器片であり、縄文土器と思われるが判断できない。



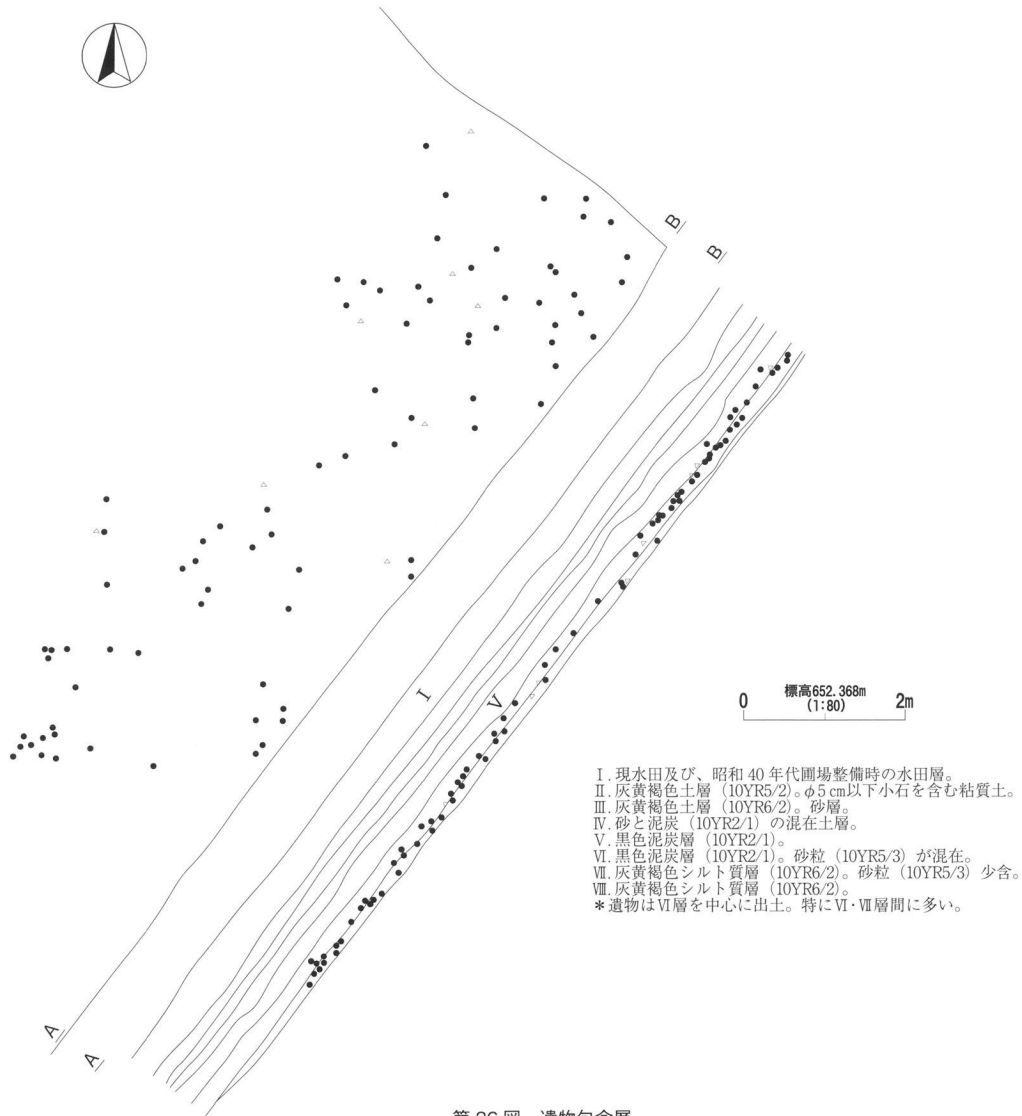
○遺物包含層

調査区の北東隅、イ6・7、ウ6～8グリットを中心にした範囲に遺物の集中が認められたため、遺物包含層として出土遺物すべてを3次元上に記録した。水平には10×3.6mの範囲に垂直には1.2m前後の範囲のまとまりが確認された。基本層位のVI・VII層が該当する。調査区外にのびているため、本来の広がりや、その成因は不明である。

出土遺物の大半は縄文土器であり、前期の諸磯式(1)が最も古く、中期後半の唐草文系(6・7)や加曾利E系(9・12)などが認められるが、大半を占めるものは後期の無文土器であり、堀之内式に並行するものと思われる。石器は磨石・敲石、打製石斧、石鏃が認められる。磨石については、遺跡の立地上石材は無尽蔵に入手可能なため、使用の痕跡が確実に認められるものだけを選択した。いずれにしても、今回の調査区の隣接地に該期の集落址が存在することは確実であろう。



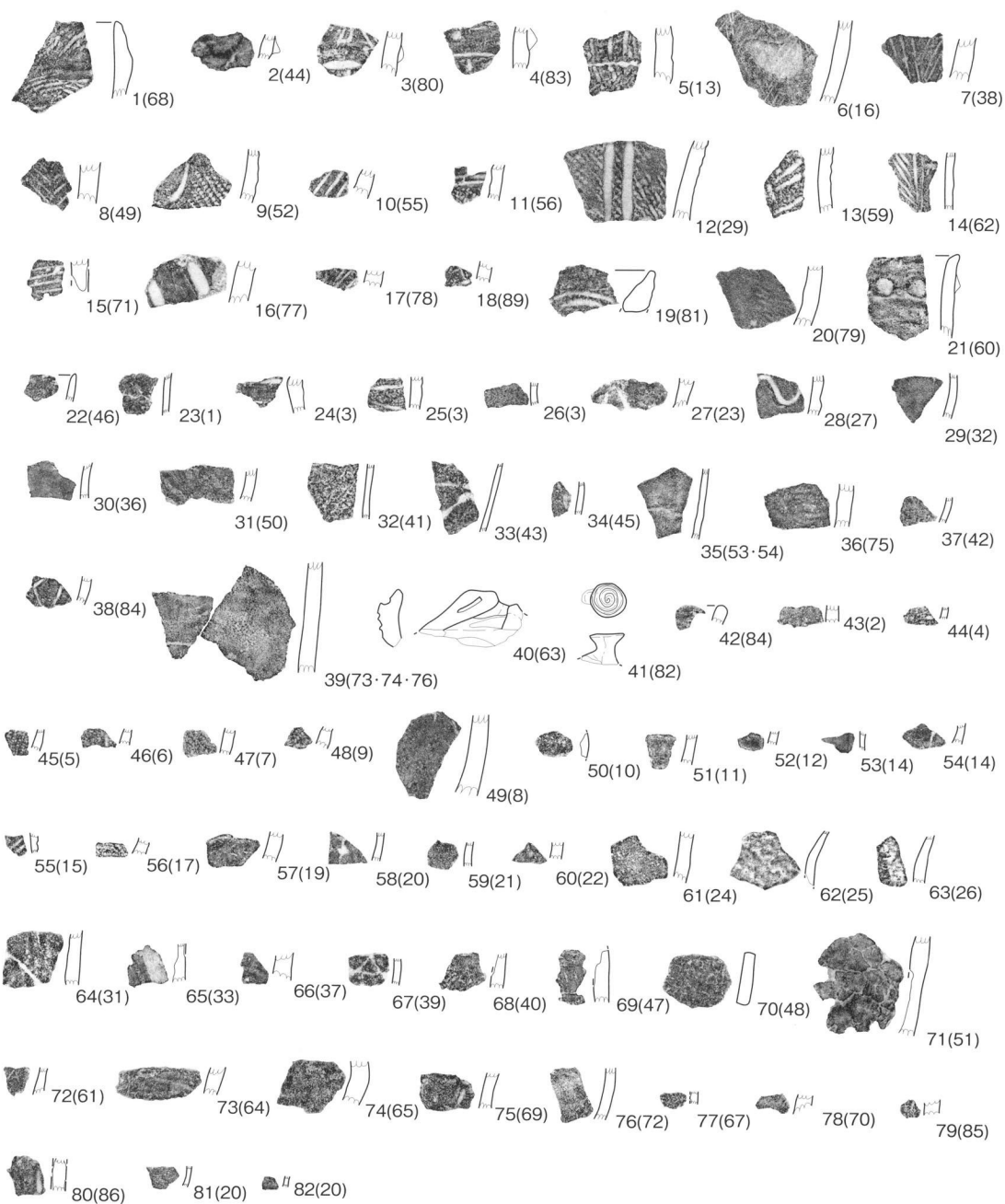
第35図 遺物包含層出土石器



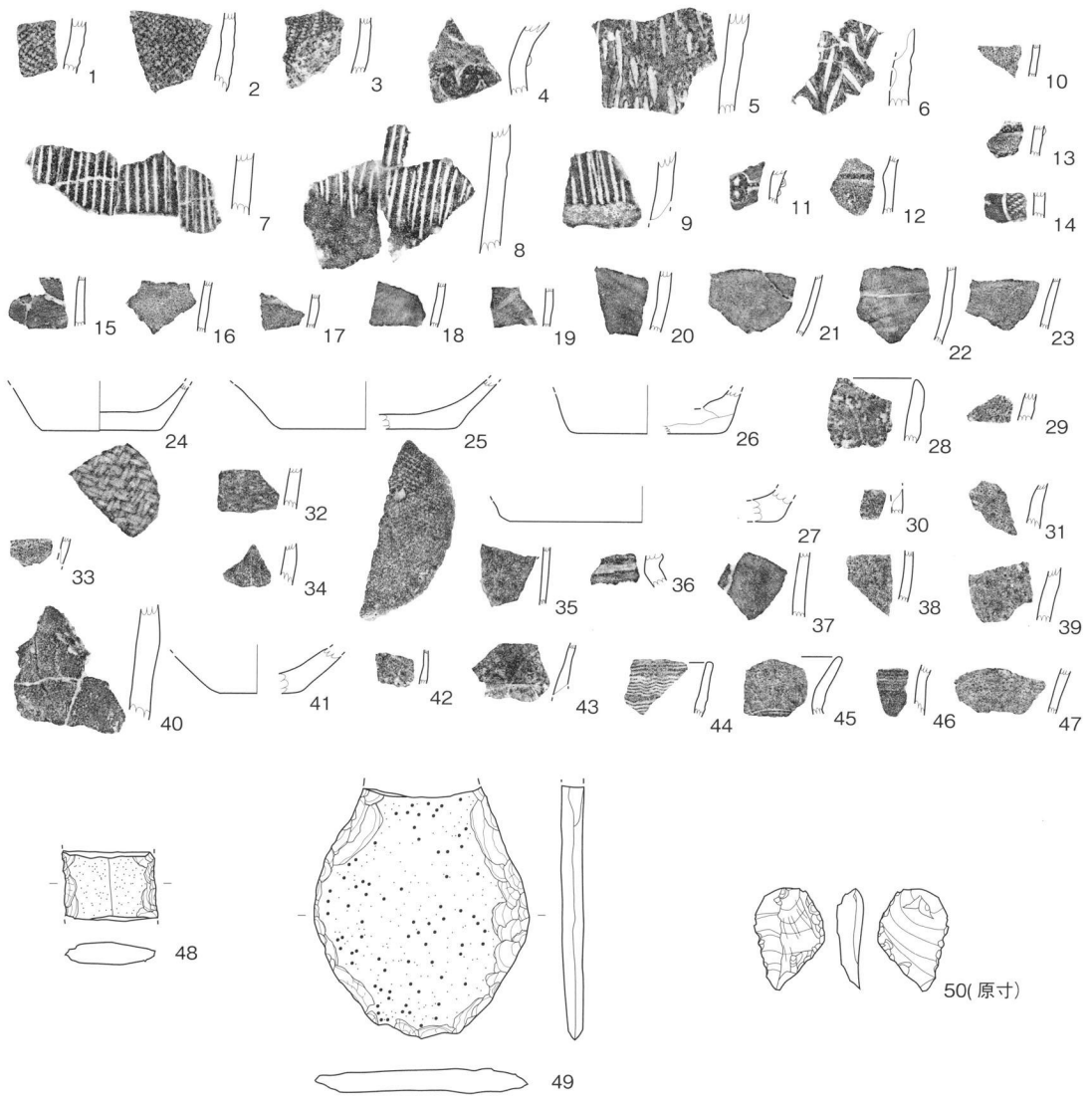
第36図 遺物包含層

○遺構外出土遺物

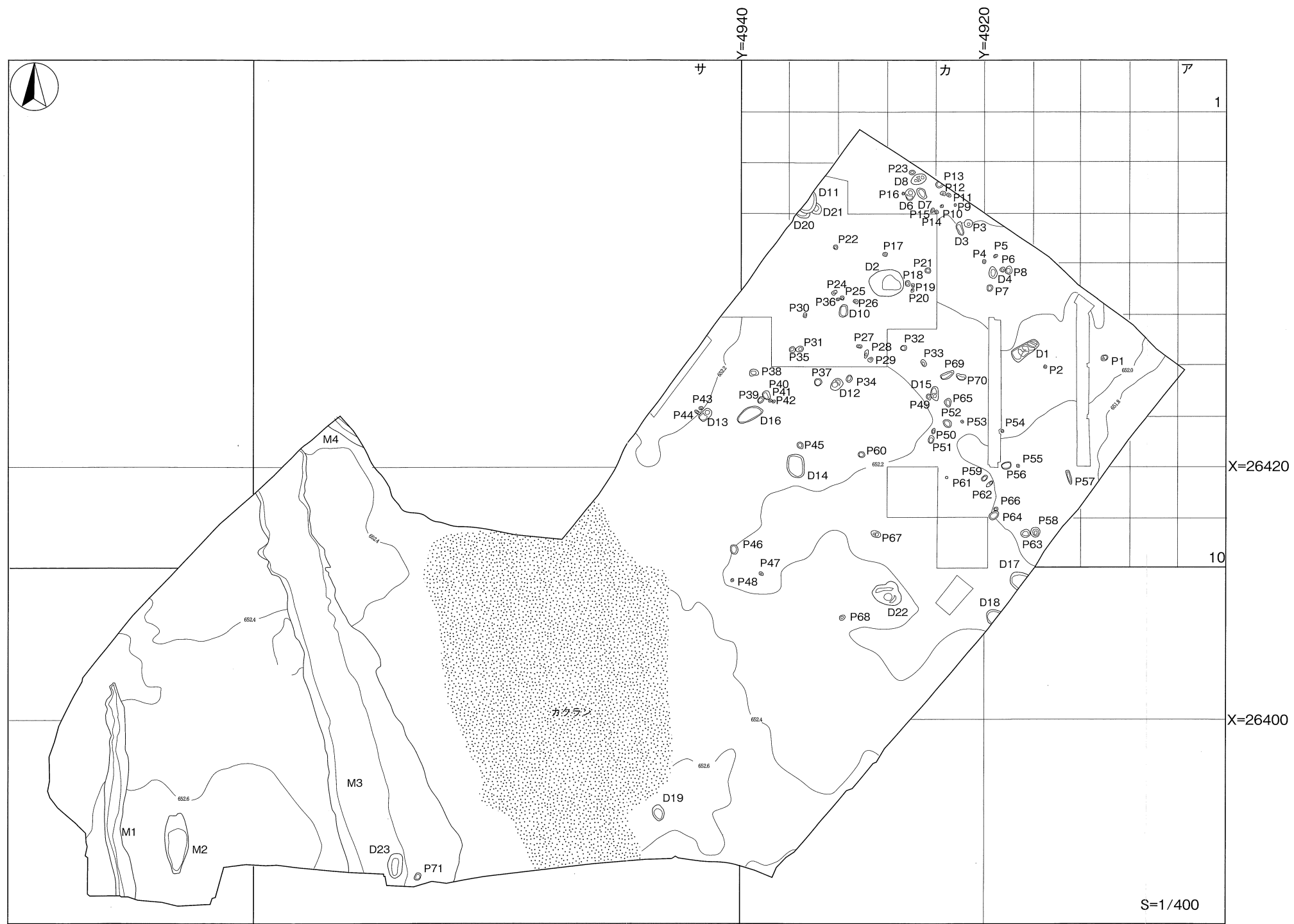
遺構外出土遺物は主として、重機による表土除去作業及び遺構検出作業において出土したものである。その大半は土器であるが、石器もわずかながら含まれている。概要を以下に記していく。1は羽状縄文が施されるもので、縄文前期の土器と思われる。胎土に繊維は含まない。2・3は単節の縄文が施されるもので、縄文中期の土器と思われる。4～9は縄文中期後半の土器で、6が唐草文系の他は曾利系の土器である。7～9は同一個体であるが接合点は認められない。10～41は縄文後期の土器であるが、そのほとんどは無文である。堀之内式期の所産であろう。44～47は弥生土器である。4点共に後期に位置付けられよう。42・43土師器である。時期は不明である。48・49は打製石斧で、48は基部と刃部を欠損、49は基部を欠損する。2点共に溶結凝灰岩製である。50は黒曜石製の削器である。剥片の両脇に2次加工が認められる。



第 37 図 遺物包含層出土土器



第 38 図 遺構外出土遺物



第 39 図 北畑遺跡 I 全体図

遺構名	No.	器種	器形	法量		成形面		調整面	備考	出土位置
				口徑(長)	底徑(短)	器高(厚)	重量等			
D1	1	縄文土器	深鉢					網代底	後期 (堀之内)、回転実測No.1・2	D1・シTR-2
	2	縄文土器	深鉢	(7.0)					後期 (堀之内)、破片実測、拓本	
	3	縄文土器	深鉢					沈線文	後期 (堀之内)、破片実測、拓本	
	4	縄文土器	深鉢						後期 (堀之内)、破片実測、拓本	
D6	5	石器	磨石	9.7	5.3	4.0	24			
	1	縄文土器	深鉢					平行沈線	後期 (堀之内?)、破片実測、拓本	
	2	縄文土器	深鉢					平行沈線、RL縄文	後期 (堀之内?)、破片実測、拓本	
D7	3	縄文土器	深鉢					1・2之同一個体	後期 (堀之内?)、破片実測、拓本	
	1	縄文土器	深鉢						後期、破片実測、拓本	
D9	1	縄文土器	深鉢						後期、破片実測、拓本	
	2	縄文土器	深鉢						後期、破片実測、拓本	
D11	1	縄文土器	深鉢						破片実測、拓本	
	2	縄文土器	深鉢						破片実測、拓本	
D12	1	縄文土器	深鉢					沈線	後期 (堀之内)、破片実測、拓本	
	2	縄文土器	深鉢						後期 (堀之内)、破片実測、拓本	
	3	縄文土器	深鉢						後期 (堀之内)、破片実測、拓本	
	4	縄文土器	深鉢						後期 (堀之内)、破片実測、拓本	
	5	縄文土器	深鉢						後期 (堀之内)、破片実測、拓本	
	6	縄文土器	深鉢						後期 (堀之内)、破片実測、拓本	
	7	縄文土器	深鉢						後期 (堀之内)、破片実測、拓本	
	8	縄文土器	深鉢						後期 (堀之内)、破片実測、拓本	
	9	縄文土器	深鉢						後期 (堀之内)、破片実測、拓本	
	10	縄文土器	深鉢						後期 (堀之内)、破片実測、拓本	
	11	縄文土器	深鉢						後期 (堀之内)、破片実測、拓本	
	12	縄文土器	深鉢						後期 (堀之内)、破片実測、拓本	
	13	縄文土器	深鉢						後期 (堀之内)、破片実測、拓本	
	14	弥生土器							破片実測、拓本	
D18	15	石器	削器	5.5	5.5	0.8	24		澄結凝灰岩	
	1	縄文土器	深鉢						後期?、破片実測、拓本	
D22	1	縄文土器	深鉢					沈線	後期 (堀之内)、破片実測、拓本	
	2	縄文土器	?						後期、破片実測、拓本	
	3	縄文土器	?						後期、破片実測、拓本	
	4	縄文土器	?						後期、破片実測、拓本	
	5	縄文土器	?						後期、破片実測、拓本	
	6	縄文土器	?						後期、破片実測、拓本	
	7	縄文土器	?						後期、破片実測、拓本	
	8	縄文土器	?						後期、破片実測、拓本	
	9	土師器	坏?					黑色処理	後期、破片実測、拓本	

第1表 出土遺物一覧表1 (D1・6・7・9・11・12・18・22)

遺構名	No.	器種	器形	法量		成形		調整	備考	出土位置
				口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等			
M1	1	縄文土器	深鉢					短沈線	中期後半、破片実測、拓本	
	2	縄文土器	深鉢					沈線+縄文	中期後半、破片実測、拓本	
	3	縄文土器	深鉢					沈線	中期後半、破片実測、拓本	
	8	縄文土器	深鉢					沈線	中期初頭、破片実測、拓本	
	4	縄文土器	深鉢						後期?、破片実測、拓本	
	5	縄文土器	深鉢						後期?、破片実測、拓本	
	6	縄文土器	深鉢						後期?、破片実測、拓本	
M2	7	縄文土器	深鉢	4.2	5.0	0.9	190	刻目	後期?、破片実測、拓本	
	8	石器	削器						破片実測、拓本	
M3	1	弥生土器							破片実測、拓本	
	2	弥生土器							破片実測、拓本	
M4	1	縄文土器	深鉢	30.0				櫛描波状文、櫛描横線文	前期諸磯a、破片実測、拓本	
	2	縄文土器	深鉢	(9.8)			ハラケズリ	縄文	回転実測、1の体部	
	3	縄文土器	深鉢					沈線	後期?、破片実測、拓本	
	2	縄文土器	深鉢	(9.7)					後期?、破片実測、拓本	
P37	4	土師器	環						回転実測	
	5	土師器	環	(11.5)	5.4	(5.05)		底~体部ハラケズリ	古墳中期、破片実測、拓本	
	6	土師器	甕					ハラケズリ	奈良時代、完全実測	
	7	灰釉陶器	?				施釉	付高台	破片実測、拓本	
	1	縄文土器	?						大原2号窯、回転実測	
	1	縄文土器	?						破片実測、拓本	
遺物 包含層	1	縄文土器	深鉢					縄文	前期(諸磯b)、破片実測、拓本、No.68	
	2	縄文土器	深鉢					隆帯	中期、破片実測、拓本、No.44	
	3	縄文土器	深鉢					隆帯+沈線	中期中葉、No.83と同一個体、破片実測、拓本、No.80	
	4	縄文土器	深鉢					隆帯+沈線	中期中葉、No.80と同一個体、破片実測、拓本、No.83	
	5	縄文土器	深鉢					沈線文	中期後半(唐草文?)、破片実測、拓本、No.13	
	6	縄文土器	深鉢					沈線、隆帯剥落	中期後半(唐草文)、破片実測、拓本、No.16	
	7	縄文土器	深鉢					沈線(アヤスギ)	中期後半(唐草文)、破片実測、拓本、No.38	
	8	縄文土器	深鉢					沈線(アヤスギ)	中期後半(唐草文)、破片実測、拓本、No.49	
	9	縄文土器	深鉢					沈線+縄文	中期後半(加E系)、破片実測、拓本、No.52	
	10	縄文土器	深鉢					沈線	中期、破片実測、拓本、No.55	
	11	縄文土器	深鉢					縄文+沈線	中期後半(加E)、破片実測、拓本、No.56	
	12	縄文土器	深鉢					沈線+縄文	中期後半(加E)、破片実測、拓本、No.29	
	13	縄文土器	深鉢					沈線	中期後半(唐草文系)、破片実測、拓本、No.59	
	14	縄文土器	深鉢					沈線(アヤスギ文)	中期後半(唐草文系)、破片実測、拓本、No.62	
	15	縄文土器	深鉢					沈線	中期、破片実測、拓本、No.71	
	16	縄文土器	深鉢					沈線	中期後半、破片実測、拓本、No.77	
	17	縄文土器	深鉢					沈線	中期、破片実測、拓本、No.78	
	18	縄文土器	深鉢					沈線	中期後半、破片実測、拓本、No.89	

第2表 出土遺物一覽表2 (M1~M4・P37・39・遺物包含層1~18)

遺構名	No.	器種	器形	法 量		成 形 面	調 整 面	備 考	出土位置	
				口徑(長)	底徑(短)器高(厚)重量等					
遺物 包含層	19	縄文土器	深鉢				沈線	中期中葉、No.83と同一個体?、破片実測、拓本、No.81		
	20	縄文土器	深鉢					破片実測、拓本、No.79		
	21	縄文土器	深鉢				凸帯文	後期、破片実測、拓本、No.60		
	22	縄文土器	深鉢					後期、破片実測、拓本、No.46		
	23	縄文土器	深鉢					後期、破片実測、拓本、No.1		
	24	縄文土器	深鉢			沈線		後期?、破片実測、拓本、No.3		
	25	縄文土器	深鉢			沈線間に縄文		後期?、破片実測、拓本、No.3		
	26									
	27	縄文土器	深鉢				沈線	後期、破片実測、拓本、No.23		
	28	縄文土器	深鉢				沈線	後期?、破片実測、拓本、No.27		
	29	縄文土器	深鉢					後期?、破片実測、拓本、No.32		
	30	縄文土器	深鉢					後期、破片実測、拓本、No.36		
	31	縄文土器	深鉢					後期(堀之内)、破片実測、拓本、No.50		
	32	縄文土器	深鉢					後期、破片実測、拓本、No.41		
	33	縄文土器	深鉢					後期、破片実測、拓本、No.43		
	34	縄文土器	深鉢					後期、破片実測、拓本、No.45		
	35	縄文土器	深鉢					後期(堀之内)、破片実測、拓本、No.53・54		
	36	縄文土器	深鉢					破片実測、拓本、No.75		
	37	縄文土器	深鉢					後期、破片実測、拓本、No.42		
	38	縄文土器	深鉢				沈線	後期、破片実測、拓本、No.84		
	39	縄文土器	深鉢					後期(堀之内)、破片実測、拓本、No.73・74・76		
	40	縄文土器	深鉢突起					後期、破片実測、No.63		
	41	縄文土器	深鉢突起				沈線	後期、破片実測、No.82		
	42	縄文土器	深鉢					破片実測、拓本、No.84		
	43	縄文土器	?					破片実測、拓本、No.2		
	44	縄文土器	?					破片実測、拓本、No.4		
	45	縄文土器	?					破片実測、拓本、No.5		
	46	縄文土器	?					破片実測、拓本、No.6		
	47	縄文土器	?					破片実測、拓本、No.7		
	48	縄文土器	?					破片実測、拓本、No.9		
	49	縄文土器	深鉢					破片実測、拓本、No.8		
	50	縄文土器	深鉢					破片実測、拓本、No.10		
	51	縄文土器	深鉢					破片実測、拓本、No.11		
	52	縄文土器	深鉢					破片実測、拓本、No.12		
	53	縄文土器	深鉢					破片実測、拓本、No.14		
	54	縄文土器	深鉢					破片実測、拓本、No.14		
	55	縄文土器	深鉢				沈線	破片実測、拓本、No.15		
	56	縄文土器	深鉢					破片実測、拓本、No.17		
	57	縄文土器	深鉢					破片実測、拓本、No.19		
	58	縄文土器	深鉢					破片実測、拓本、No.20		

第3表 出土遺物一覽表3 (遺物包含層19~58)

遺構名	No.	器種	器形	法量		成形面		調整面	備考	出土位置
				口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等			
遺物 包含層	59	縄文土器	深鉢				剥離		破片実測、拓本、No.21	
	60	縄文土器	深鉢						破片実測、拓本、No.22	
	61	縄文土器	深鉢						破片実測、拓本、No.24	
	62	縄文土器	深鉢					全面剥離	破片実測、拓本、No.25	
	63	縄文土器	深鉢					一部剥離	破片実測、拓本、No.26	
	64	縄文土器	深鉢						破片実測、拓本、No.31	
	65	縄文土器	深鉢					一部剥離	破片実測、拓本、No.33	
	66	縄文土器	深鉢						破片実測、拓本、No.37	
	67	縄文土器	深鉢						破片実測、拓本、No.39	
	68	縄文土器	深鉢						破片実測、拓本、No.40	
69	縄文土器	深鉢						破片実測、拓本、No.47		
70	縄文土器	土器片・凹盤						破片実測、拓本、No.48		
71	縄文土器	深鉢						破片実測、拓本、No.51		
72	縄文土器	深鉢						破片実測、拓本、No.61		
73	縄文土器	深鉢						破片実測、拓本、No.64		
74	縄文土器	深鉢						破片実測、拓本、No.65		
75	縄文土器	深鉢						破片実測、拓本、No.69		
76	縄文土器	深鉢						破片実測、拓本、No.72		
77	縄文土器	深鉢						破片実測、拓本、No.67		
78	縄文土器	深鉢						破片実測、拓本、No.70		
79	縄文土器	深鉢						破片実測、拓本、No.85		
80	縄文土器	深鉢					沈線	破片実測、拓本、No.86		
81	土師器	坏					剥離	破片実測、拓本、No.20		
82	土師器	甕						破片実測、拓本、No.20		
83	石器	磨石	5.6	4.3	2.2	800		全体凹滑、No.130		
84	石器	磨石	6.2	5.9	3.9	2400		全体凹滑、下端敲打痕、No.140		
85	石器	磨石	8.1	6.0	3.0	1740		全体凹滑、No.147		
86	石器	磨石	10.8	7.3	5.0	1260		全体凹滑、端部敲打痕、No.92		
87	石器	打製石斧						No.141		
88	石器	石鏃	1.7		2.5	10		黒曜石、No.90		
検出	1	縄文土器	深鉢					細文(羽状)	前期、破片実測、拓本	
	2	縄文土器	深鉢					細文	中期？破片実測、拓本	カ3
	3	縄文土器	深鉢						中期後半？、破片実測、拓本	キ4
	4	縄文土器	深鉢					隆帯(波状)	中期後半、破片実測、拓本	
	5	縄文土器	深鉢					短沈線	中期後半、破片実測、拓本	
	6	縄文土器	深鉢					アヤスギ文	中期後半(唐草文)、破片実測、拓本	
	7	縄文土器	深鉢					半裁竹管による沈線	中期後半、8・9と同一個体、破片実測、拓本	
	8	縄文土器	深鉢					半裁竹管による沈線	中期後半、7・9と同一個体、破片実測、拓本	
	9	縄文土器	深鉢					半裁竹管による沈線	中期後半、7・8と同一個体、破片実測、拓本	
	10	縄文土器	深鉢						後期？、破片実測、拓本	E壁セクション

第4表 出土遺物一覽表4 (遺物包含層59~88・検出1~10)

遺構名	No.	器種	器形	法量		成形面	調整面		備考	出土位置	
				口徑(長)	底徑(短)器高(厚)重量等		外	面			
検出	11	縄文土器	深鉢					[8]字状貼付文、押捺隆帯	後期(堀之内)、破片実測、拓本		
	12	縄文土器	深鉢					隆帯	後期(堀之内)、破片実測、拓本		
	13	縄文土器	深鉢					隆帯	後期(堀之内)、破片実測、拓本		
	14	縄文土器	深鉢					沈線+縄文	後期(堀之内)、破片実測、拓本		
	15	縄文土器	深鉢						後期(堀之内)、破片実測、拓本		
	16	縄文土器	深鉢						後期(堀之内)、破片実測、拓本		
	17	縄文土器	深鉢						後期(堀之内)、破片実測、拓本		
	18	縄文土器	深鉢						後期(堀之内)、破片実測、拓本		
	19	縄文土器	深鉢						後期(堀之内)、破片実測、拓本		
	20	縄文土器	深鉢						後期(堀之内)、破片実測、拓本		
	21	縄文土器	深鉢						後期(堀之内)、破片実測、拓本		
	22	縄文土器	深鉢					沈線	後期(堀之内)、破片実測、拓本		
	23	縄文土器	深鉢						後期(堀之内)、24と同一個体?、破片実測、拓本		
	24	縄文土器	深鉢		(7.5)			網代底	後期(堀之内)、回転実測、拓本		
	25	縄文土器	鉢		(11.0)			網代底	後期、回転実測、拓本		
	26	縄文土器	深鉢		(9.6)		剥離	網代底、マメツ	後期、回転実測		
	27	縄文土器	深鉢		(17.6)			網代底、マメツ	後期、回転実測		
	28	縄文土器	深鉢						破片実測、拓本	カ4	
	29	縄文土器	?						破片実測、拓本	カ5	
	30	縄文土器	?						破片実測、拓本	キ2	
	31	縄文土器	?						破片実測、拓本	キ2	
	32	縄文土器	?						破片実測、拓本	ク6	
	33	?							破片実測、拓本	E壁セクシヨン	
	34	縄文土器	深鉢						時期不明、破片実測、拓本		
	35	縄文土器	深鉢						後期?、破片実測、拓本		
	36	縄文土器	深鉢					沈線	時期不明、破片実測、拓本		
	37	縄文土器	深鉢						時期不明、破片実測、拓本		
	38	縄文土器	深鉢						後期?、破片実測、拓本		
	39	縄文土器	深鉢						時期不明、破片実測、拓本		
	40	縄文土器	深鉢						時期不明、破片実測、拓本		
	41	縄文土器	深鉢		(5.6)				時期不明、回転実測		
	42	土師器	甕				ナデ	ハラケズリ	破片実測、拓本	E壁セクシヨン	
	43	土師器	甕					ハラケズリ	破片実測、拓本	E壁セクシヨン	
	44	弥生土器	甕				ハラミガキ	櫛描波状文	破片実測、拓本	E壁セクシヨン	
	45	弥生土器	甕				ハラミガキ	籬状文?	破片実測、拓本	E壁セクシヨン	
	46	弥生土器	甕					櫛描籬状文?	後期(ハコシミズ)、破片実測、拓本		
	47	弥生土器	甕				ハラミガキ	櫛描波状文	破片実測、拓本	E壁セクシヨン	
	48	石器	打製石斧								
	49	石器	打製石斧								
	50	石器	削器		3.2	2.1	0.7	4.0		黒曜石	

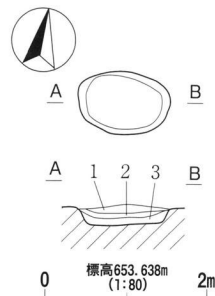
第5表 出土遺物一覧表5 (検出11~50)

第2節 北畑遺跡Ⅱ

○D1 号土坑

Ⅲキ1グリットで検出された。他遺構との重複関係は有さない。楕円形の平面プランを呈し、断面は逆梯形である。長軸方位をN-90°-Eにとり、長軸長-1.19m、短軸長-0.78m、深度-0.22m、面積-0.7㎡の規模を有する。

出土遺物は皆無であり、時期・性格共に不明である。



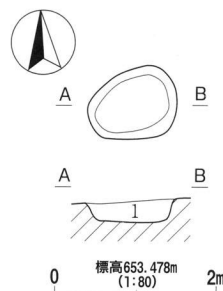
1. 褐灰色土層 (10YR5/1) 砂利層。
2. 褐灰色土層 (10YR5/1) 砂層。
3. 1層と同一であるが石の含有が少ない。

第40図 D1号土坑

○D2 号土坑

Ⅲキ1、Ⅲク1グリットにまたがって検出された。他遺構との重複関係は有さない。楕円形の平面プランを呈し、断面は逆梯形である。長軸方位をN-68°-Eにとり、長軸長-1.15m、短軸長-0.95m、深度-0.28m、面積-0.77㎡の規模を有する。

出土遺物は皆無であり、時期・性格共に不明である。



1. 褐灰色土層 (10YR5/1) 砂利層。

第41図 D2号土坑

○D3 号土坑

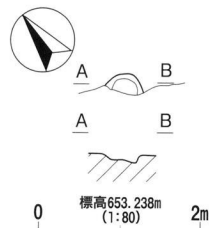
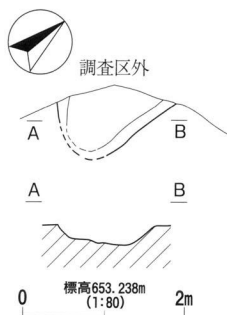
Ⅳウ4グリットで検出された。調査区外にのびるため、深度-0.22m以外の形状や規模は不明である。

出土遺物としては、須恵器横瓶が認められ、その形態から奈良時代の所産と思われる。遺構の全容が不明なため、土坑としたが、横瓶という特殊な形態の遺物が出土しており、本址の性格は特殊かもしれない。

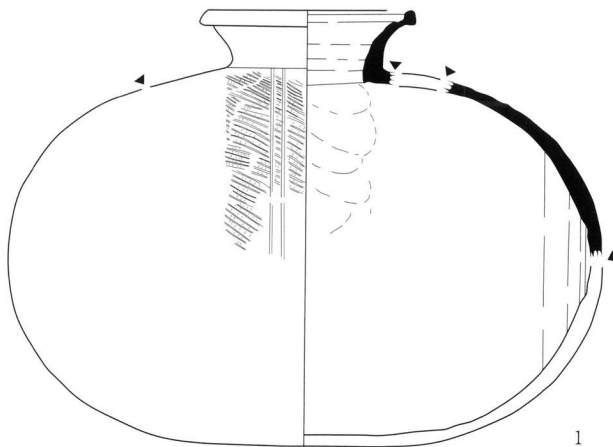
○P1

Ⅰコ5グリットで検出された。深度-0.05m以外の規模は不明である。片貝川の氾濫による河床礫の堆積による破壊を受けている。

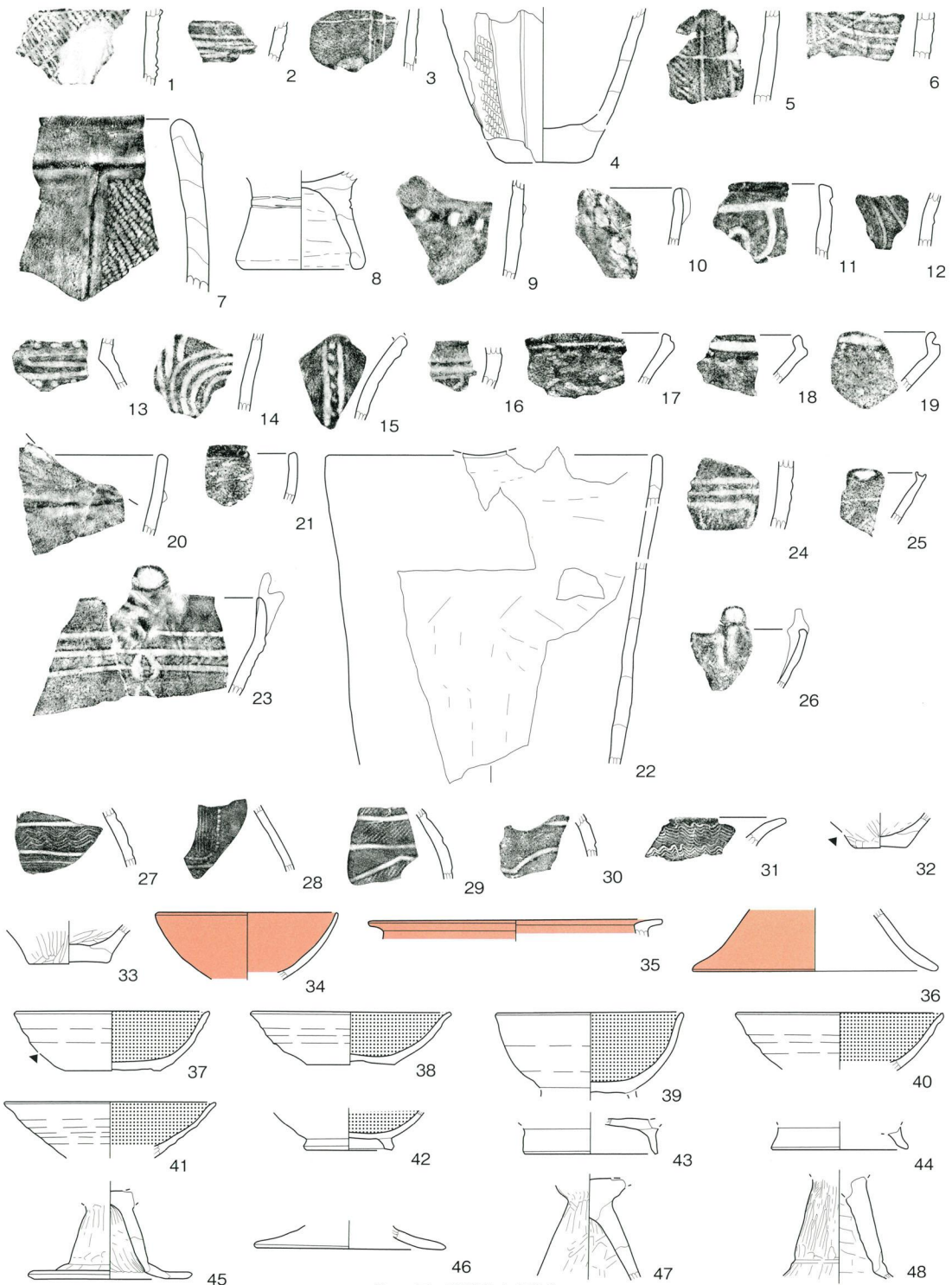
出土遺物は皆無であり、時期・性格共に不明である。



第43図 P1



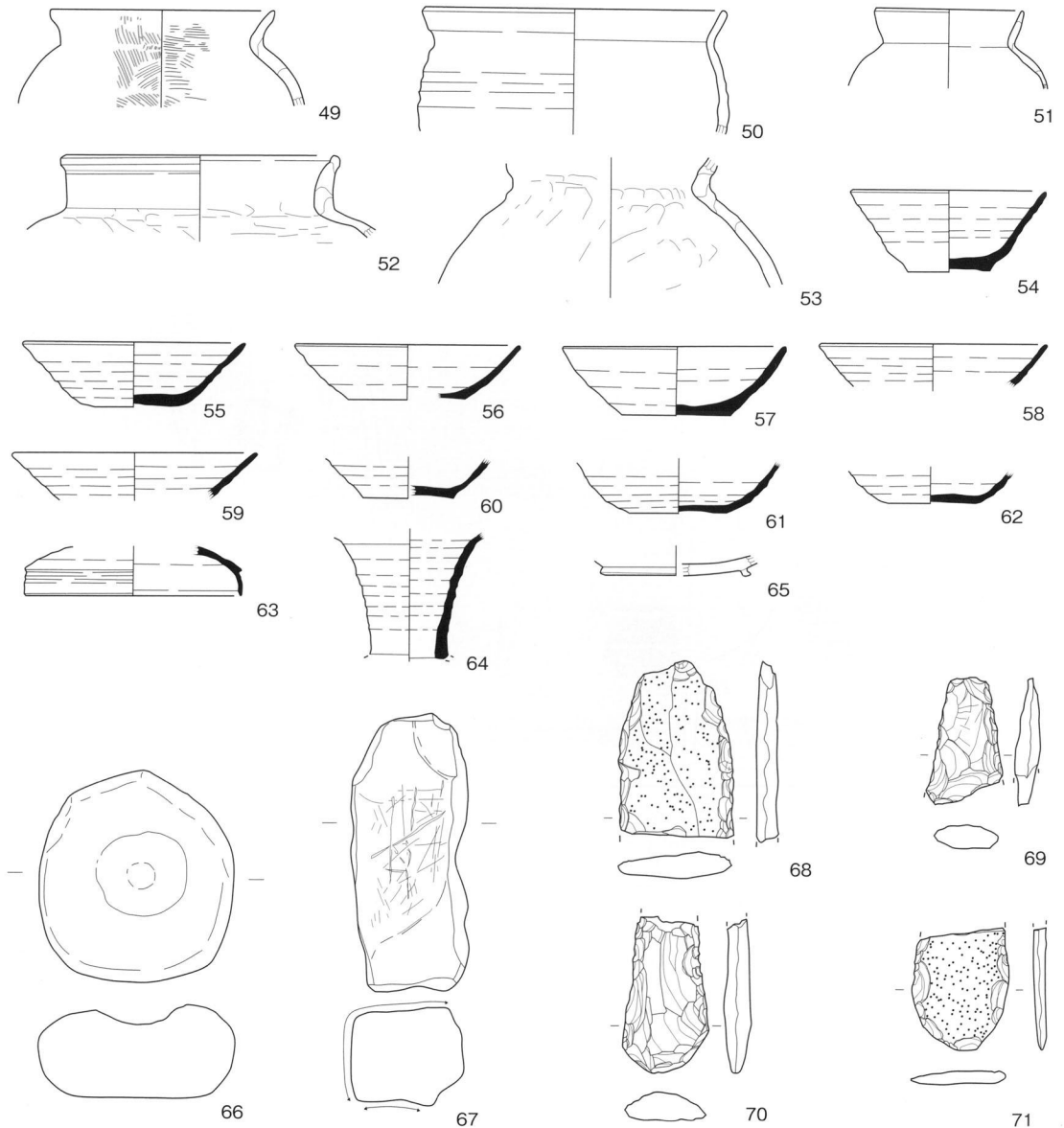
第42図 D3号土坑



第 44 图 遺構外出土遺物 1

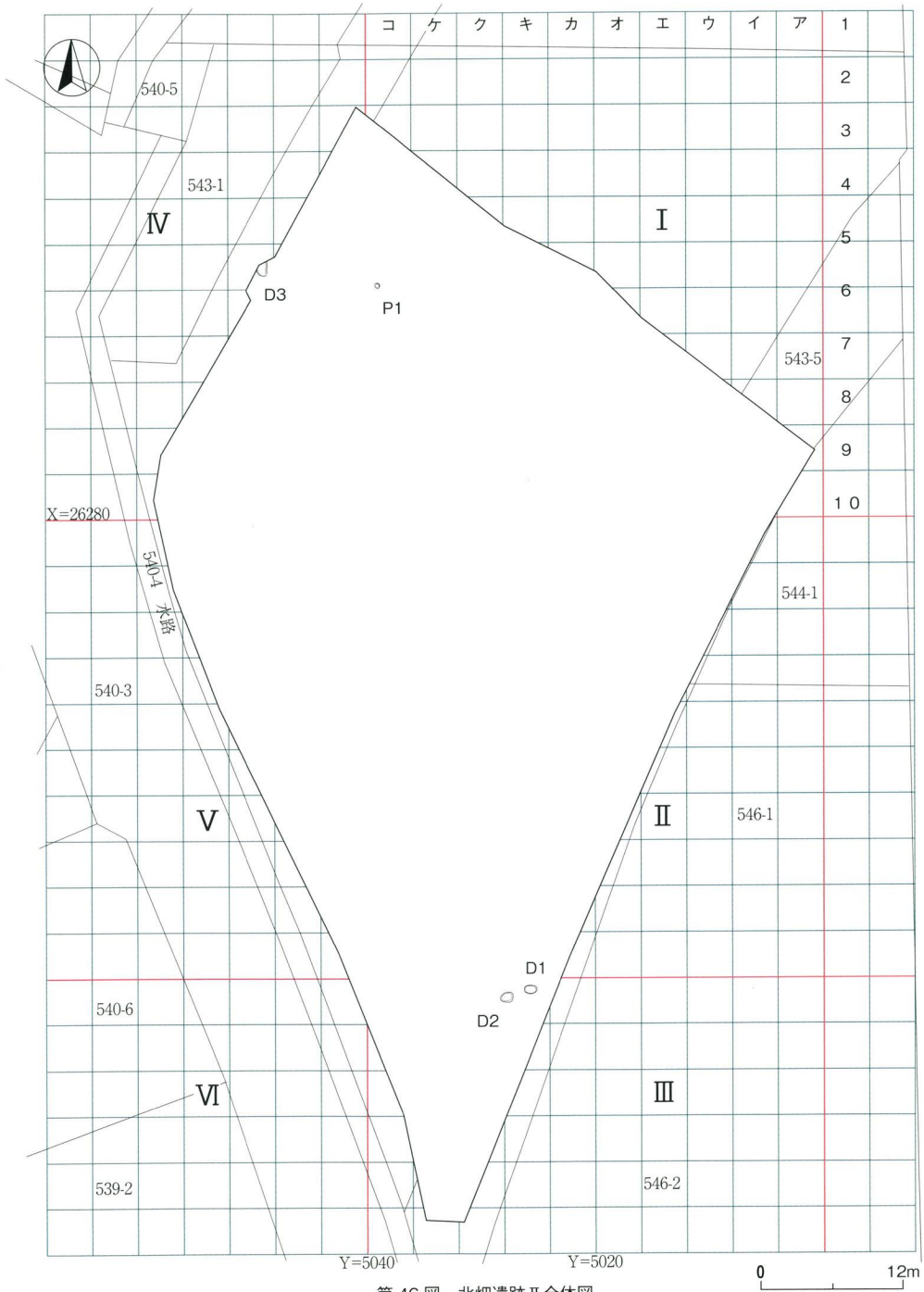
○遺構外出土遺物

遺構外出土遺物としては、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、石器が認められる。縄文土器には第44図1～3のような中期初頭、4～8のような中期後半、9～26のような後期のものが認められる。量的に最も多いものは後期の土器で、中でも堀之内式期のものが主体である。弥生土器(27～30)は中期後半栗林期のものが最も多い。土師器は45～48の高坏、51～53の壺などが該当する古墳時代中期と、37～44の坏・碗、50の甕が該当する平安時代(9世紀後半～10世紀前半)のものが主体であるが、49の甕は前期の可能性が高い。須恵器の主体は54～62の坏や64の壺のような平安時代(9世紀後半～10世紀前半)のものであり、土師器に対応する。63の古墳時代後期の坏蓋など



第45図 遺構外出土遺物2

も認められる。1点ではあるが、65の灰釉陶器も出土した。石器は66の凹石、67の砥石、68～71の打製石斧が認められるが、その時期については確定しがたい。



第46図 北畑遺跡Ⅱ全体図

遺構名	No.	器種	器形	法量		成形・調整		備考	出土位置
				口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等		
D3	1	須恵器	横瓶	12.5			当具痕、ナデ 叩き目、ナデ	奈良時代	

第6表 D3出土遺物一覧表

遺構名	No.	器種	器形	法量		成形・調整		備考	出土位置
				口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等		
	1	縄文土器	深鉢				ナデ、ミガキ 半裁竹管による隆起縄文、ヘラ、半裁竹管による格子状集合沈線文	縄文時代中期初頭、破片実測	I 19
	2	縄文土器	深鉢				ナデ、ミガキ 半裁竹管による横位隆起縄文	縄文時代中期初頭、破片実測	II コ9
	3	縄文土器	深鉢				ナデ、ミガキ ヘラによる波状文	縄文時代中期初頭、破片実測	I ケ7
	4	縄文土器	深鉢		5.5		ナデ、ミガキ ヘラによる縦位沈線+縄文 (RL)	縄文時代中期後半 (加E)、完全実測	II カ3
	5	縄文土器	深鉢				ナデ、ミガキ ヘラによる縦位沈線+縄文 (RL)	縄文時代中期後半 (加E)、破片実測	II オ1
	6	縄文土器	深鉢				ナデ、ミガキ 半裁竹管によるウロコ状沈線	縄文時代中期後半所謂「佐久系」、破片実測	I ケ6
	7	縄文土器	深鉢				ナデ、ミガキ 隆帯、縄文 (RL)	縄文時代中期後半 (加E)、破片実測	II コ9
	8	縄文土器	台付深鉢		8.0		ナデ ヘラによる条の平行沈線	縄文時代中期後半、回転実測	IV ア6
	9	縄文土器	深鉢				ナデ 凸帯文	縄文時代後期、破片実測	II コ8
	10	縄文土器	深鉢				ナデ 凸帯文	縄文時代後期、破片実測	IV イ5
	11	縄文土器	深鉢				ナデ、ミガキ 沈線+縄文	縄文時代後期 (称名寺?)、破片実測	II コ9
	12	縄文土器	深鉢				ナデ、ミガキ 沈線+縄文	縄文時代後期 (称名寺?)、破片実測	I ケ6
	13	縄文土器	鉢				ナデ、ミガキ 竹管による沈線+凹形刺突	縄文時代後期 (堀ノ内)、破片実測	II ケ3
	14	縄文土器	深鉢				ナデ、ミガキ 竹管による沈線文	縄文時代後期 (堀ノ内)、破片実測	ケ ン
	15	縄文土器	深鉢				ナデ、ミガキ 竹管による沈線文+凹形刺突	縄文時代後期 (堀ノ内)、破片実測	II コ9
	16	縄文土器	深鉢				ナデ、ミガキ 隆帯+竹管による沈線文	縄文時代後期、破片実測	IV ウ5
	17	縄文土器	鉢				ナデ、ミガキ 口縁1条の沈線	縄文時代後期 (堀ノ内)、破片実測	I コ6
	18	縄文土器	鉢				ナデ、ミガキ 口縁1条の沈線	縄文時代後期 (堀ノ内)、破片実測	III ケ1
	19	縄文土器	鉢				ナデ、ミガキ 口縁1条の沈線	縄文時代後期 (堀ノ内)、土製円盤?、破片実測	I コ7
	20	縄文土器	深鉢				ナデ、ミガキ 隆帯	縄文時代後期、破片実測	I キ8
	21	縄文土器	深鉢				ナデ、ミガキ	縄文時代後期、破片実測、土製円盤?	I ケ6
	22	縄文土器	深鉢				ケズリ→ナデ	縄文時代後期、回転実測、波状口縁	II キ2
	23	縄文土器	深鉢				ミガキ、円孔1ヶ	縄文時代後期 (加B)、破片実測	II キ2
	24	縄文土器	深鉢				ミガキ 突起、棒状工具による平行沈線文	縄文時代後期 (加B)、破片実測	V イ7
	25	縄文土器	鉢				ミガキ 突起、棒状工具による平行沈線文	縄文時代後期 (加B)、破片実測	II キ2
	26	縄文土器	鉢				ミガキ 突起、縄文	縄文時代後期、破片実測	V ア3

第7表 遺構外出土遺物一覧表1

遺構名	No.	器種	器形	法量		内面	外面	調整	備考	出土位置
				口径(長)	底径(短)					
	27	弥生土器	壺			ハケ目	棒状工具による平行沈線、櫛状工具による波状文及び櫛位条線	弥生時代中期 (栗林)、破片実測	Iキ8	
	28	弥生土器	壺			ハラケズリ→ナデ	櫛状工具による櫛位条線、刺突列	弥生時代中期 (栗林)、破片実測	Iコ6	
	29	弥生土器	壺			ハラケズリ→ナデ	棒状工具による沈線文、縄文	弥生時代中期 (栗林)、破片実測	IV16	
	30	弥生土器	壺			ハラケズリ→ナデ	棒状工具による沈線文	弥生時代中期 (栗林)、破片実測	IIウ7	
	31	弥生時代	甕			ミガキ	櫛揃き波状文	弥生時代後期、破片実測	IV15	
	32	弥生土器	壺	3.6		ナデ	ケズリ→ミガキ	弥生時代中期?、完全実測	IIケ3	
	33	弥生土器	甕	5.6		ケズリ→ナデ	ケズリ→ミガキ	弥生時代?期、完全実測	Iケ7	
	34	弥生土器	高坏?	13.0		赤彩	赤彩	弥生時代中期、回転実測	IV15	
	35	弥生土器	高坏	21.0		赤彩	赤彩	弥生時代後期、回転実測	IIIク3	
	36	弥生土器	高坏	17.5		ケズリ→ナデ	赤彩	弥生時代?期、回転実測	V13	
	37	土師器	坏	13.6	4.2	黒色処理	右回転糸切り	平安時代、完全実測	IIケ10	
	38	土師器	坏	14.2	3.7	黒色処理	右回転糸切り	平安時代、回転実測	V13	
	39	土師器	?	13.3		黒色処理	回転ハラケズリ→付高台	平安時代、回転実測	IIカ3	
	40	土師器	?	14.8		黒色処理		平安時代、回転実測	ケン	
	41	土師器	?	15.0		黒色処理		平安時代、回転実測	ケン	
	42	土師器	?	6.0		黒色処理	回転ハラケズリ→付高台	平安時代、回転実測	IIIケ1	
	43	土師器	?	9.6		黒色処理	回転ハラケズリ→付高台	平安時代、回転実測	IIIケ1	
	44	土師器	?	9.8		ナデ	付高台	平安時代、回転実測	IIケ9	
	45	土師器	高坏	11.6		ナデ	ハラミガキ	平安時代、回転実測	IIケ9	
	46	土師器	高坏	13.6		ナデ	ナデ	古墳時代中期、回転実測	Iク7	
	47	土師器	高坏			ケズリ	ハラミガキ	古墳時代中期、回転実測	IIコ9	
	48	土師器	高坏			ケズリ	ハラミガキ	古墳時代中期、回転実測	Iク7	
	49	土師器	甕	14.2		ハケ目	ハケ目→ハラミガキ	古墳時代中期、回転実測	IIIク3	
	50	土師器	ロクロ甕	19.2		黒色処理	ハケ目	古墳時代前期?、回転実測	Iキ9	
	51	土師器	壺	9.2		ナデ	ロクロナデ	平安時代、回転実測	ケン	
	52	土師器	壺	17.2		ナデ	ナデ	古墳時代中期?、回転実測	Iク7	
	53	土師器	壺			ケズリ	ケズリ、叩き成形?	古墳時代中期、回転実測	IIIク3	
	54	須恵器	坏	12.6	5.1	ロクロナデ	右回転糸切り	古墳時代中期、回転実測	Iク8	
	55	須恵器	坏	14.3	6.6	ロクロナデ	右回転糸切り	平安時代、回転実測	IIカ3	
	56	須恵器	坏	14.4	7.4	ロクロナデ	方向不明回転糸切り	平安時代、回転実測	IIケ10 ケン	

第8表 遺構外出土遺物一覧表2

遺構名	No.	器種	器形	法量			成形		調整面	備考	出土位置
				口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内面			
	57	須恵器	坏	14.5	7.0	4.5		右回転系切り		平安時代、完全実測	Ⅱケ10
	58	須恵器	坏	14.6						平安時代、回転実測	V 13
	59	須恵器	坏	15.8						平安時代、回転実測	Ⅱケ10
	60	須恵器	坏		6.0			右回転系切り		平安時代、回転実測	V 13
	61	須恵器	坏		6.2			方向不明回転系切り		平安時代、回転実測	Ⅲケ1
	62	須恵器	坏		6.6			右回転系切り		平安時代、回転実測	Ⅲケ1
	63	須恵器	坏蓋	13.4				天井部回転ヘラケズリ		古墳時代、回転実測	I ケ6
	64	須恵器	長頸壺					ロクロナデ		平安時代、回転実測	Ⅲケ1
	65	灰軸陶器	碗		9.6			回転ヘラケズリ→付高台		平安時代、回転実測	Ⅱキ4
	66	石器	凹石	13.6	12.5	6.0	1400g			片面に1孔	Ⅱコ8
	67	石器	砥石	17.7	7.5	6.3	1370g				I キ10
	68	石器	打製石斧								V 13
	69	石器	打製石斧								I キ7
	70	石器	打製石斧								Ⅳ75
	71	石器	打製石斧								I ケ6

第9表 遺構外出土遺物一覧表3

第3節 北裏遺跡 I

○M1号溝址

調査区を北東から南西に向かって走る。両端共に調査区外にのびるため全容は不明である。調査区内での全長は 89 m、最大幅— 11.5m、最大深度— 0.7mの規模である。上流となる北東部分には湿地が展開していることが周辺部分の調査で確認されており、湿地部分の湧水を排水し、湿地部分を開発するためか、南西方向の下流域に水を供給するために掘削された水路が本址の性格であると考えられる。このような水路は当調査区の西方 500mに位置する国道 142 号線拡幅工事に伴う調査でも確認されており、調査区の北方台地上に展開するものと想像される集落の人々が、水田開発のために掘削したものと思われる。

出土遺物としては縄文土器、弥生土器、青磁、石器が認められる。

縄文土器は中期後半加曾利 E 式 (2・3) や唐草文系 (5) などが認められるが、量的には少ない。その他の時期としては、北畑遺跡同様に後期堀之内式 (5～11) が認められた。

弥生土器は中期後半栗林式のものが大半を占め、本址の出土遺物の主体である。以下個々の器種毎に概観する。

高坏 (12) は栗林期のものと思われるが、破片のため断定できない。甕 (13～23) の内、模様が認められない 13～15 の底部片は時期不明である。22・23 の櫛描波状文が施される 2 点が後期と思われる他は中期栗林期と思われる。壺 (24～40) は未掲載の資料も含め、器種としては最も多く出土した。すべて中期栗林期のものである。体部に施文が認められるものが多い。口縁部には単純口縁と受口状口縁の二種類が認められ、所謂「太首」のものも多い。甌 (41) は 1 点のみ出土である。時期は確定できない。

青磁は連弁文が認められる碗片が 1 点出土している。宝生寺山砦の関連かも知れない。

石器はそのほとんどが「打製石斧」(43～56) である。46 を除き破損品である。これらは弥生時代の所産と思われ、打製石斧というよりは、「石鋏」と呼称すべきかも知れない。刃部に向かい最大幅を形成する、平面丸刃の特徴的な形態である。本址掘削のために使用され、破損し、廃棄されたものであろう。磨製石斧 (57) は破損した磨製石斧の基部を敲打器として再利用したものと思われる。削器 (58) は黒曜石製であり、剥片に再加工を加えている。石包丁 (59) は 1 点のみの出土である。破損品であり、かつ未製品と思われる。石戈 (60) は、石戈に詳しい馬場伸一郎氏の教授によれば、東信地域初出土であり、身に 2 本の「樋」をもつ「近畿型石戈」の出土は県内 9 例目である。また、石戈は破損した状態で出土することが一般的であり、本例も同様である。

以上の出土遺物のうち、溝址の底面より出土したのは、栗林期の土器であり、本址の時期は弥生中期後半栗林期と考えられる。石戈も同様な時期と考えているが、出土したのは、溝址の中央付近右岸よりの上層であった。

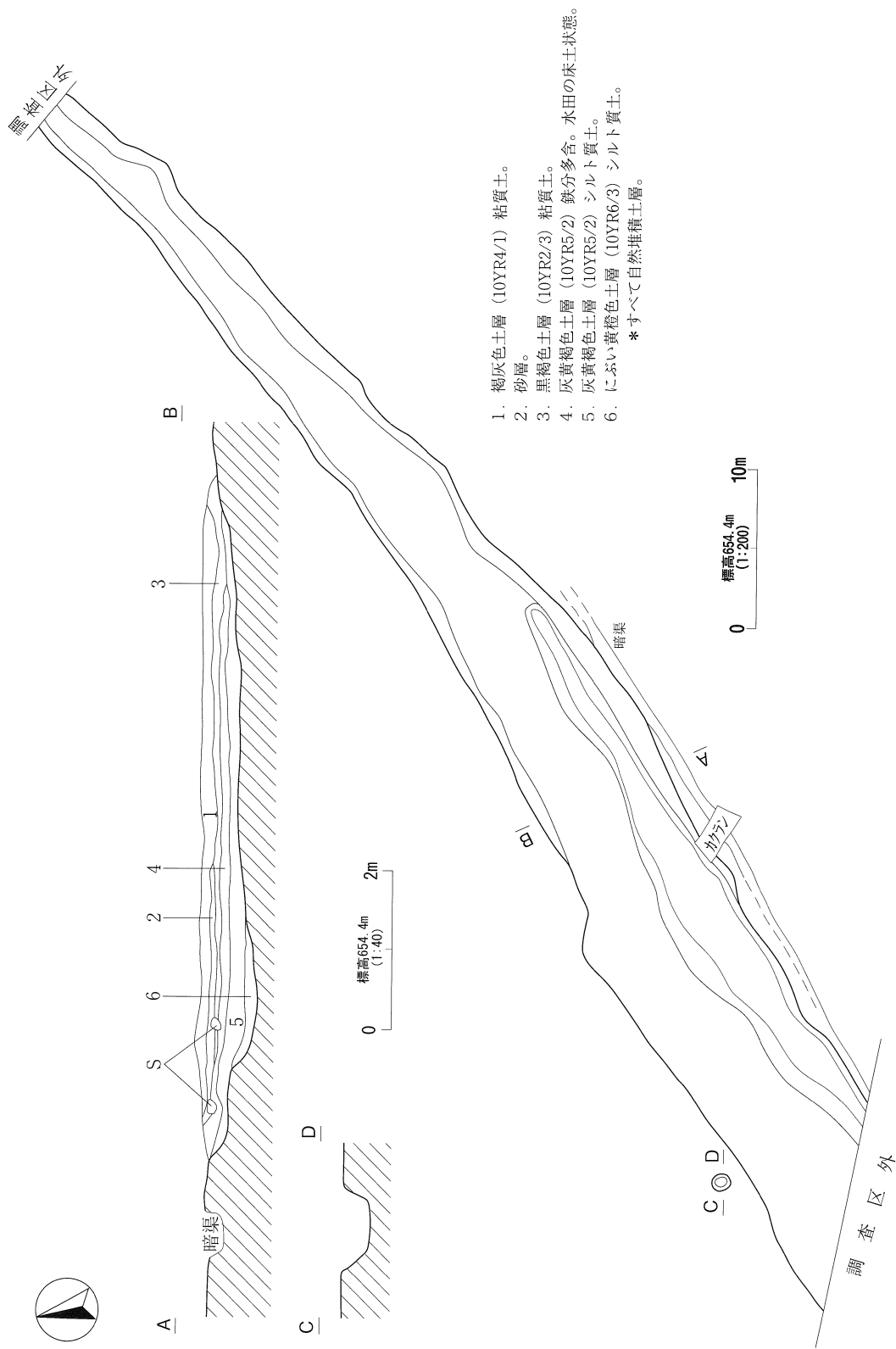
本報告書作成中に長野県埋蔵文化財センターが中野市の柳沢遺跡で銅戈・銅鐸を発見した、本来銅戈を模倣し作成されたのが石戈であり、石戈を使用する祭祀は銅戈に伴う祭祀そのものか、それを規範とする可能性が強いものであろう。神社の伝世品として、御神体となっているもの以外県内にその存在が確認されていなかった銅戈が千曲川下流域で埋納され複数出土したことにより、従来から言われていた日本海回りの県内への銅戈の進入経路の裏付けが強化された。これにより、銅戈・石戈の祭祀が同一のものと仮定した場合、その祭祀の中心地域＝千曲川流域に成立していた共同体の中心は長野盆地周辺にあった可能性が追認された、この共同体の構成員であり、銅戈を有せず石戈を代用した佐久地域の、位置をどのように解釈していくかは、佐久地域に比較的集中して出土する「銅釧」の存在や、長野と佐久に挟まれた上田地域でいまだ弥生中期の様相が不明であることが、大きな鍵ではないだろうか？

また、今回長野県埋蔵文化財センターが発見した銅戈・銅鐸は排水路を掘削し、偶然発見されたそうである。遺跡周辺や、遺跡として周知されていない場所の重要性を再認識する必要がある。

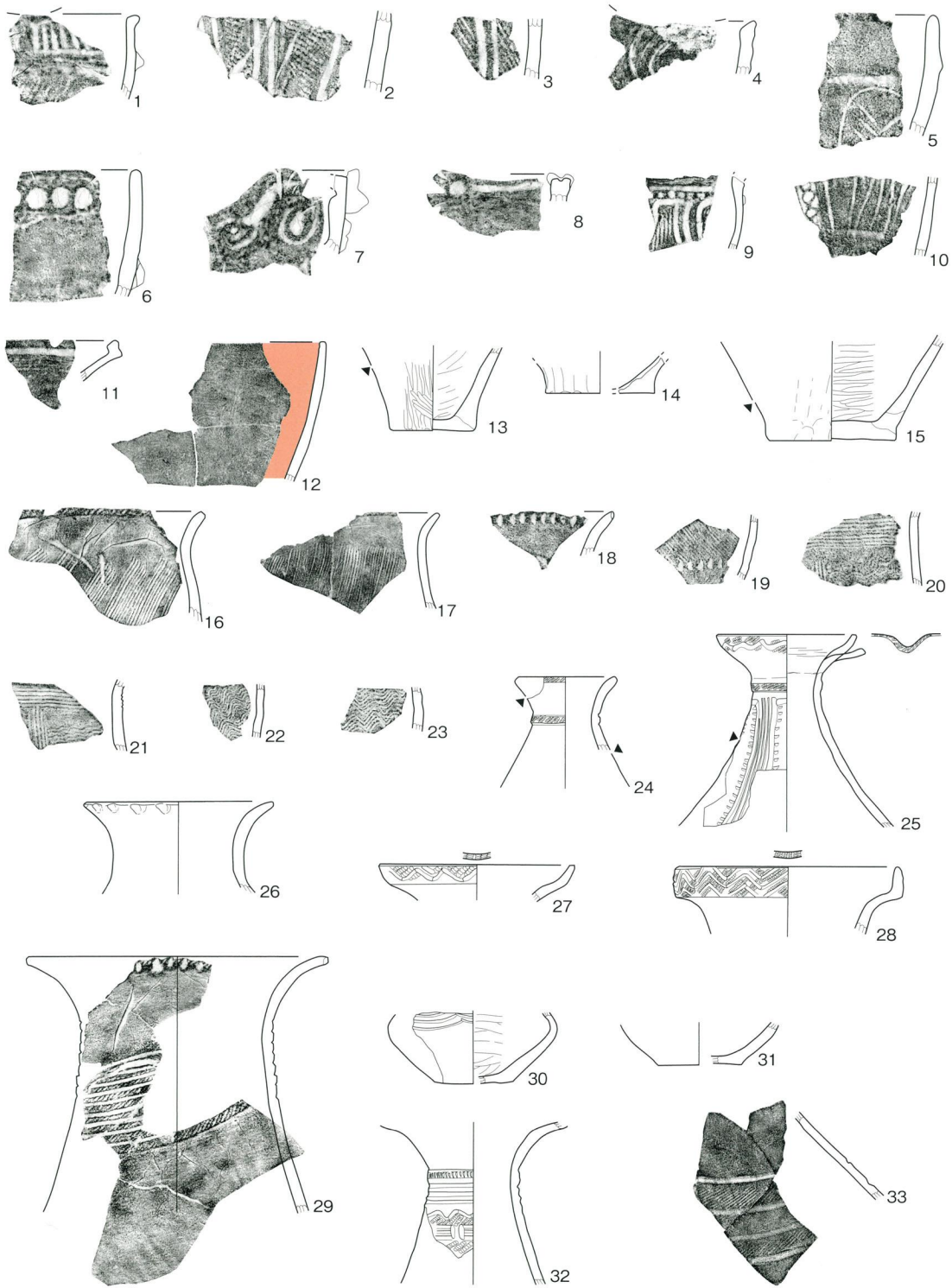
*馬場伸一郎氏には、現場に足を運んでいただき貴重な教授をいただいた。記して感謝いたします。

引用・参考文献

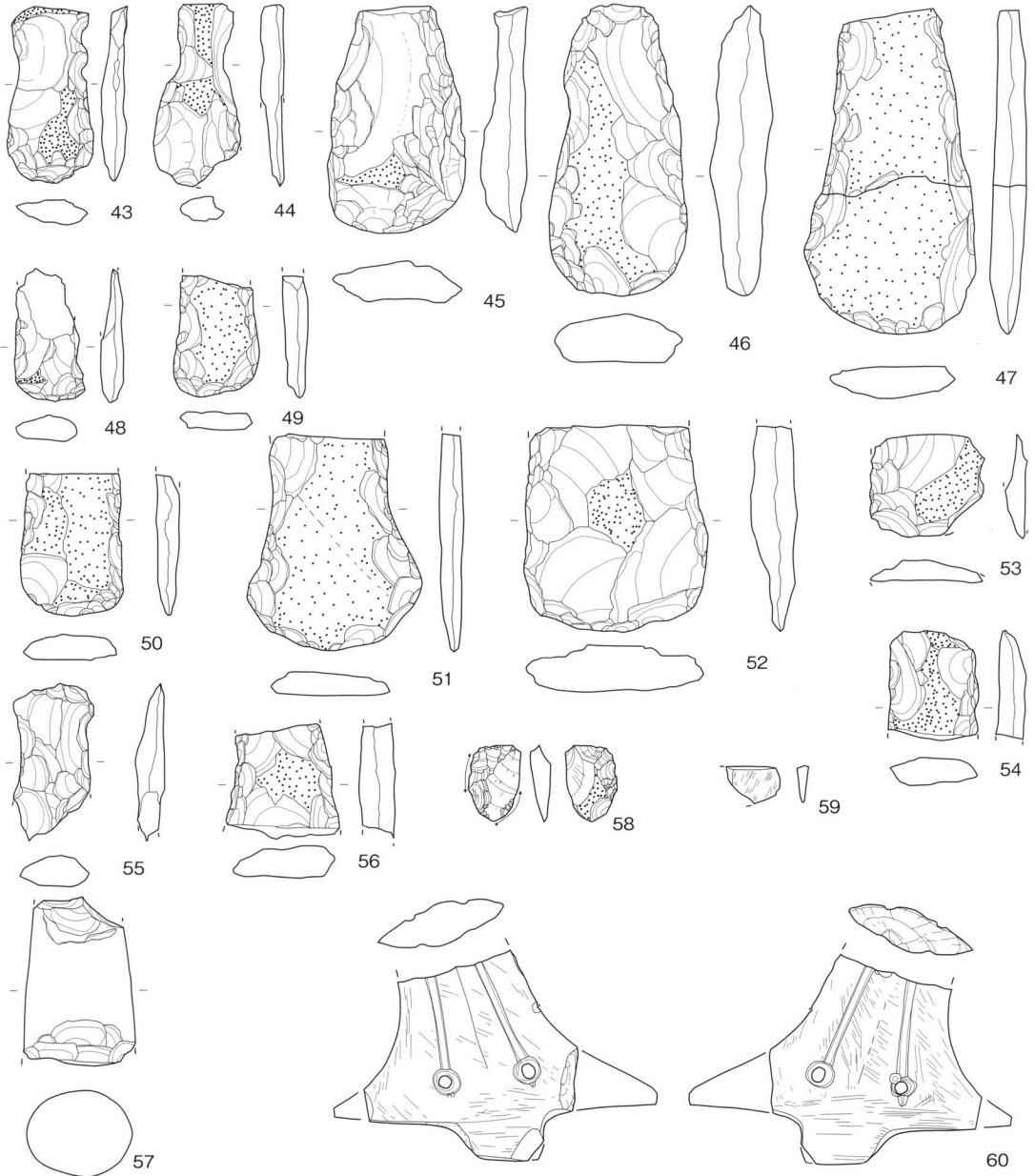
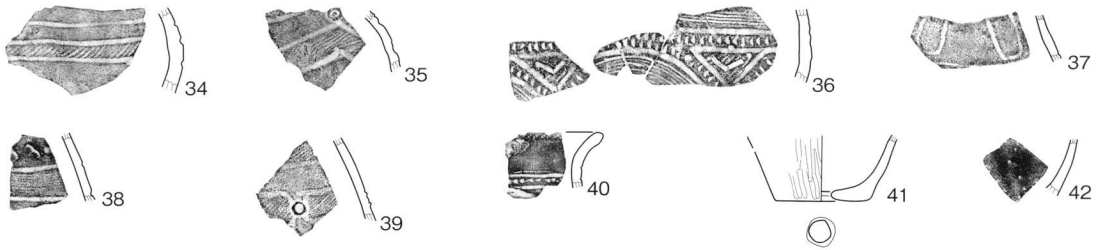
- 1991 飯島哲也 長野県考古学会誌 63 「長野市松原遺跡出土の石戈について」
- 1994 関沢 聡 中部高地の考古学Ⅳ 「松本平東部における弥生時代の石製武器について」
- 2005 森泉かよ子 佐久市埋蔵文化財調査報告書 第 127 集 「西一本柳遺跡Ⅹ」
- 2007 <http://www.city.chikushino.fukuoka.jp/furusato/sanpo16.htm> 「ちくしの散歩」16. 青銅器の祭り
- 2007 http://dazaifu.mma.co.jp/fureai/iseki_dayori/16/ 「遺跡だより 16」～武器形石製祭器「石戈(せつか)」



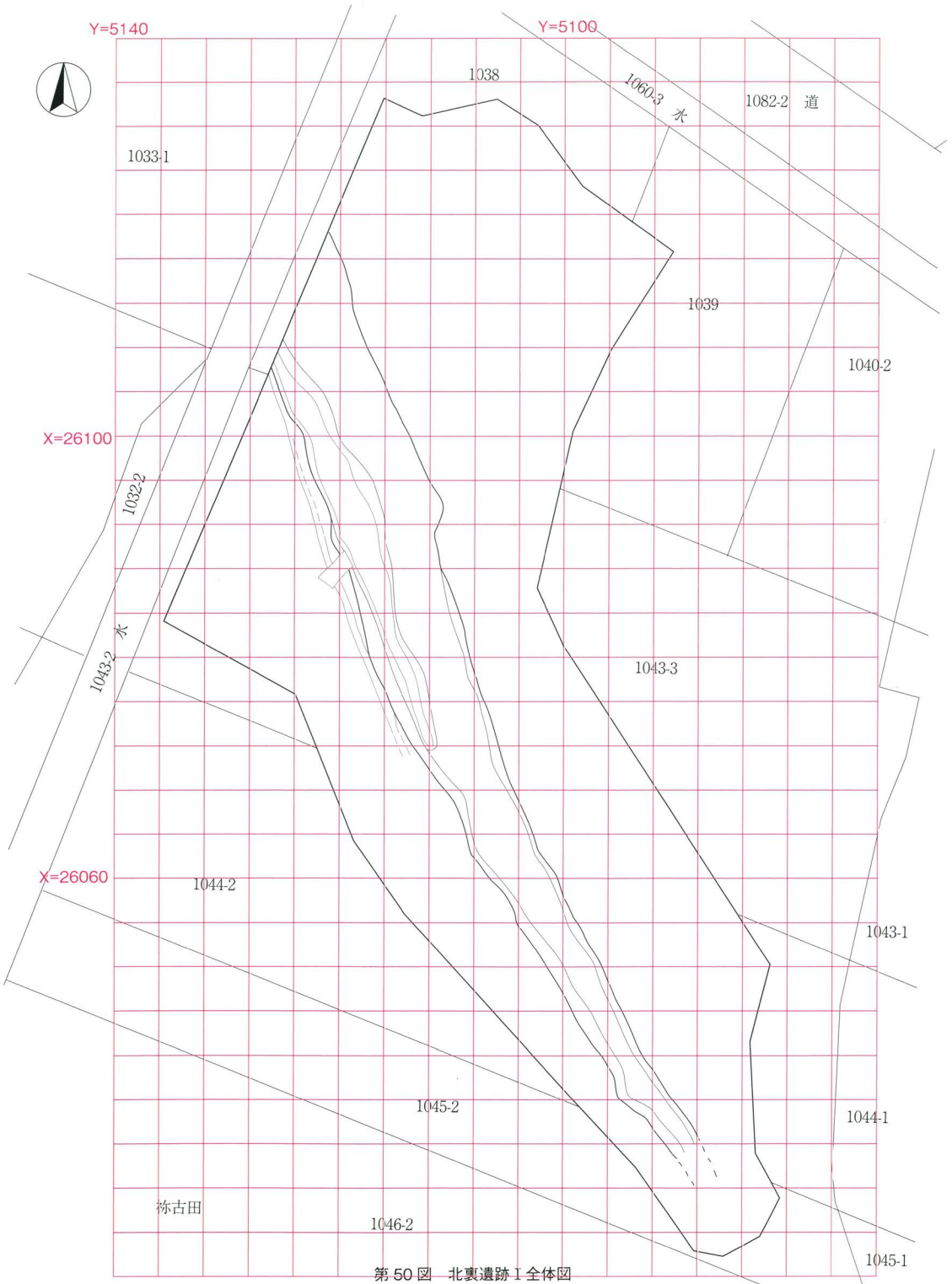
第47図 M1号溝址



第 48 图 M1 号沟址出土遗物 1



第49图 M1号满址出土遗物2



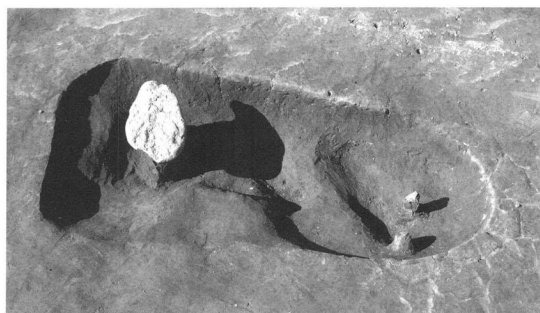
第 50 図 北裏遺跡Ⅰ全体図

遺構名	No.	器種	器形	法量		内面	成形・調整	備考	出土位置
				口径(長)	底径(短)器高(厚)重量等				
M1	1	縄文土器	深鉢				隆帯、ハラ描沈線文	縄文時代中期後半	
	2	縄文土器	深鉢				沈線+RL縄文	縄文時代中期後半(加E)	
	3	縄文土器	深鉢				沈線+RL縄文	縄文時代中期後半(加E)	
	4	縄文土器	深鉢				隆帯	縄文時代中期後半(加E)?	
	5	縄文土器	深鉢				隆帯、沈線文(アヤスギ)	縄文時代中期後半(唐草)	
	6	縄文土器	深鉢				凸帯文	縄文時代後期	
	7	縄文土器	深鉢				隆帯	縄文時代後期、8と同一個体?	
	8	縄文土器	深鉢				円形貼付文	縄文時代後期、7と同一個体?	
	9	縄文土器	深鉢				押奈隆帯、沈線文	縄文時代後期(堀ノ内)	
	10	縄文土器	深鉢				押奈隆帯、沈線文	縄文時代後期(堀ノ内)	
	11	縄文土器	深鉢				口縁に沈線	縄文時代後期(堀ノ内)	
	12	弥生土器	高坏				赤彩	弥生時代中期?、破片実測	
	13	弥生土器	甕		6.2		ハラミガキ	弥生時代?期、完全実測	
	14	弥生土器	甕		7.8		ハラミガキ	弥生時代?期、完全実測	
	15	弥生土器	甕		9.2		ハラミガキ	弥生時代?期、完全実測	
	16	弥生土器	甕				ハラミガキ	弥生時代中期、破片実測	
	17	弥生土器	甕				口唇縄文(LR)、体部備描斜走文	弥生時代中期、破片実測	
	18	弥生土器	甕				口唇縄文(LR)、体部備描斜走文	弥生時代中期、破片実測	
	19	弥生土器	甕				口唇部刻み目	弥生時代中期、破片実測	
	20	弥生土器	甕				櫛描斜走文、刻み目	弥生時代中期、破片実測	
	21	弥生土器	甕				櫛描横・縦条文	弥生時代中期、破片実測	
	22	弥生土器	甕				櫛描横・縦条文、波状文	弥生時代中期、破片実測	
	23	弥生土器	甕				櫛描波状文	弥生時代後期、破片実測	
	24	弥生土器	壺		7.3		口唇・頸部に縄文(LR)	弥生時代中期、完全実測	
	25	弥生土器	壺		10.0		縄文(LR)、棒状工具による沈線・押引、櫛描条線	弥生時代中期、回転実測	
	26	弥生土器	壺		13.6		口縁押奈により小波状	弥生時代中期、回転実測	
	27	弥生土器	壺		14.0		口縁~口唇部縄文(LR)、口縁に1条の棒状工具による波状文	弥生時代中期、回転実測	
	28	弥生土器	壺		15.6		口縁~口唇部縄文(LR)、口縁に3条の棒状工具による波状文	弥生時代中期、回転実測	
	29	弥生土器	壺		21.4		口唇に縄文・縄文押奈、頸部に平行沈線間に縄文	弥生時代中期、回転実測	
	30	弥生土器	壺		5.6		ハラケズリ	弥生時代中期、回転実測	
	31	弥生土器	壺		6.0			弥生時代中期、回転実測	
	32	弥生土器	壺				棒状工具による横位沈線、波状文押引文+縄文(LR)	弥生時代中期、回転実測	
	33	弥生土器	壺				棒状工具による平行沈線間に縄文	弥生時代中期、破片実測	
	34	弥生土器	壺				棒状工具による平行沈線間に縄文	弥生時代中期、破片実測	
	35	弥生土器	壺				棒状工具による平行沈線間に縄文、円形貼付文	弥生時代中期、破片実測	

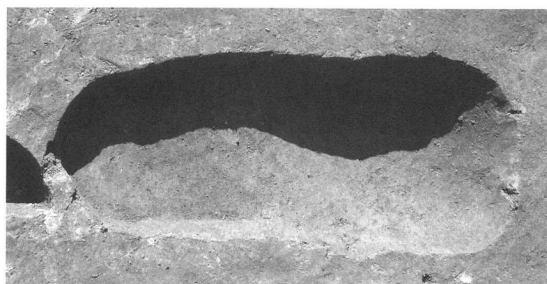
第10表 M1出土遺物一覧表1

遺構名	No.	器種	器形	法量			内面	外形・調整	備考	出土位置
				口径(長)	底径(短)	器高(厚)				
M1	36	弥生土器	壺				ハケ目	棒状工具による沈線文、押引、櫛描縞漆液状文+縄文	弥生時代中期、破片実測	
	37	弥生土器	壺					棒状工具による沈線文内ニ櫛描条線を充填	弥生時代中期、破片実測	
	38	弥生土器	壺					櫛描条線、刺突列、棒状工具による平行沈線	弥生時代中期、破片実測	
	39	弥生土器	壺					棒状工具による沈線文内ニ縄文、円形貼付文	弥生時代中期、破片実測	
	40	弥生土器	壺				ハラミガキ	ハラによる平行沈線間に棒状工具による押引き	弥生時代中期、破片実測	
	41	弥生土器	甑		5.8			ハラミガキ	弥生時代?期、完全実測、孔径1.3cm	
	42	中世	青磁碗					蓮弁文	中世時代、破片実測	
	43	石器	打製石斧	11.4	5.6	1.6	44g			
	44	石器	打製石斧	11.8	5.6	(1.6)	(97g)			
	45	石器	打製石斧	14.6	8.9	2.6	324g			
	46	石器	打製石斧	18.7	8.9	3.6	760g			
	47	石器	打製石斧	20.9	10.9	2.1	(680g)			
	48	石器	打製石斧		4.4	1.6	(65g)			
	49	石器	打製石斧		5.4	1.6	(80g)			
	50	石器	打製石斧		6.5	1.6	(159g)			
	51	石器	打製石斧		11.1	1.6	(330g)			
	52	石器	打製石斧		11.7	3.1	(675g)			
	53	石器	打製石斧				(78g)			
	54	石器	打製石斧				(150g)			
	55	石器	打製石斧				(150g)			
56	石器	打製石斧				(155g)				
57	石器	磨製石斧				(750g)				
58	石器	加工兼有剥片	4.9	3.2	1.3	21g		両端部欠損後2次加工		
59	石器	包丁				(7.8g)		黒耀石 未製品		
60	石器	石戈						有匳式石戈、有孔、鑿有		

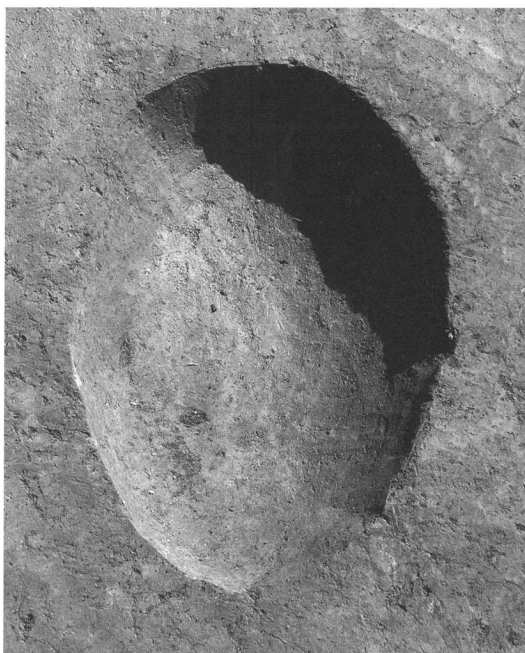
第11表 M1出土遺物一覽表2



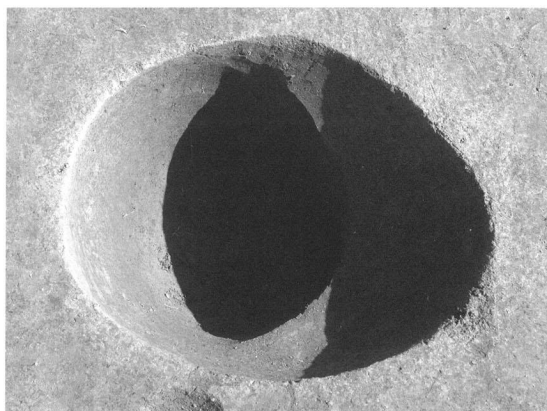
D1号土坑



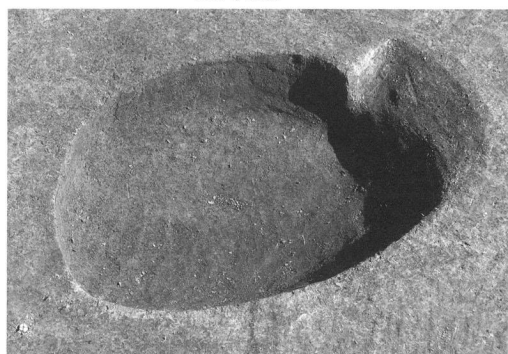
D3号土坑



D4号土坑



D6号土坑



D7号土坑

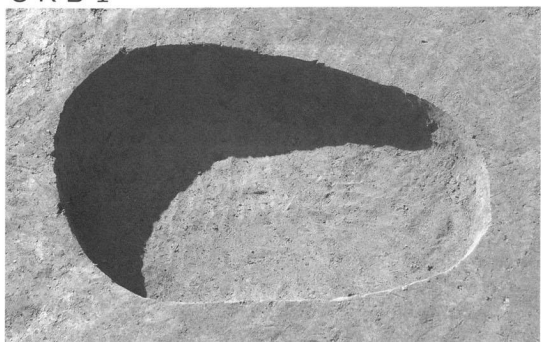


D9号土坑完掘↑

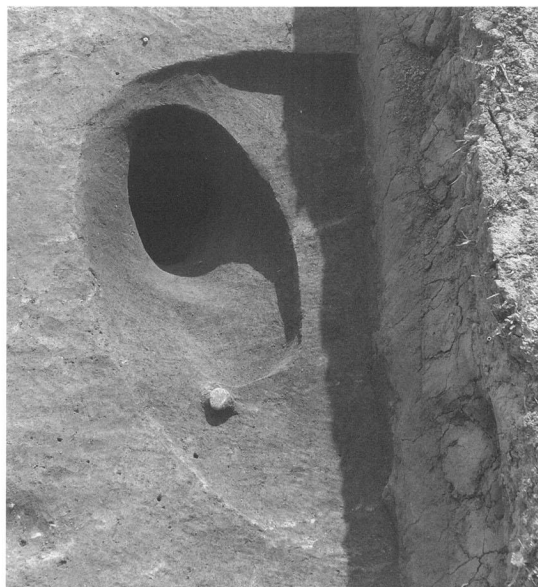
石除去後→



SKBI



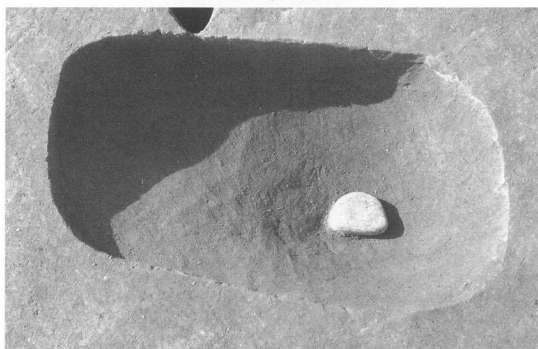
D10 号土坑



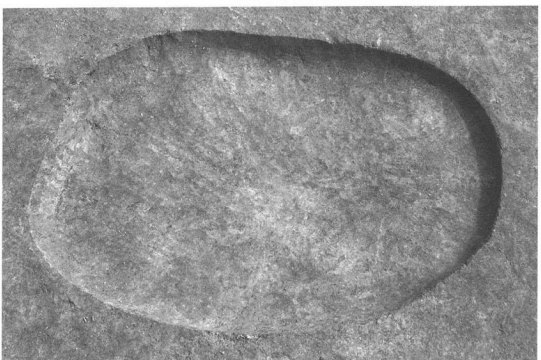
D11 号土坑



D12 号土坑



D13 号土坑



D14 号土坑



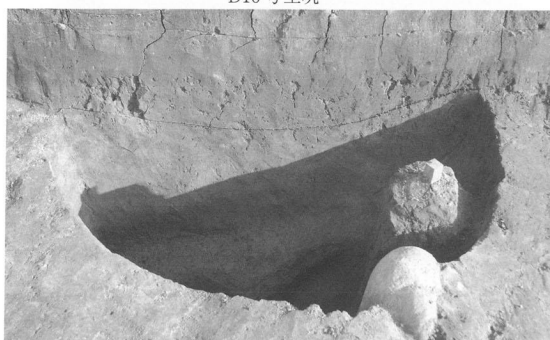
D15 号土坑



D16 号土坑



D17 号土坑



D18 号土坑



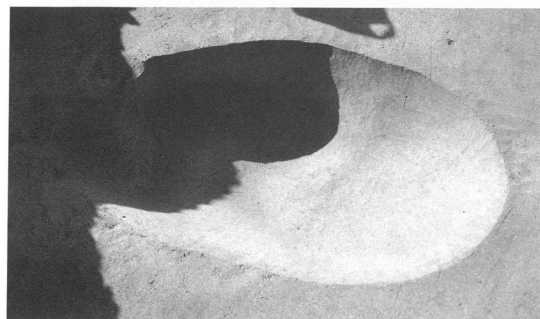
D20 号土坑



D21 号土坑



D22 号土坑



D23 号土坑

SKBI



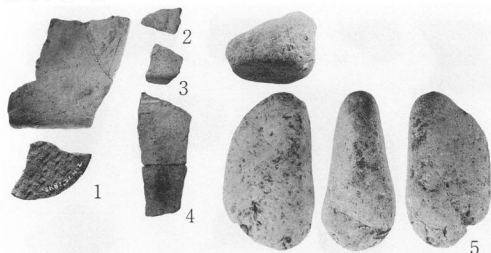
M1号溝址

M3号沟址

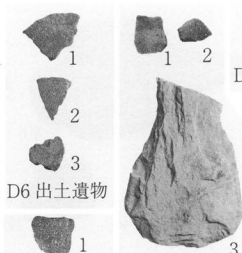


M4号沟址

SKBI



D1 出土遺物

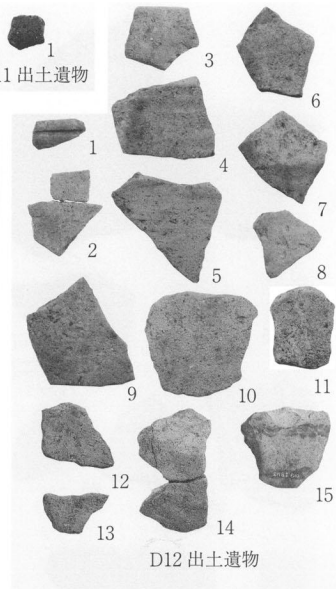


D6 出土遺物

D7 出土遺物



D9 出土遺物



D11 出土遺物

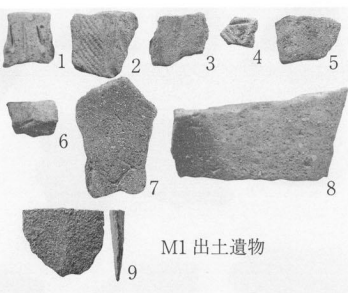
D12 出土遺物



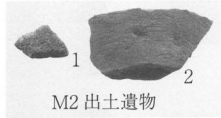
D18 出土遺物



D22 出土遺物



M1 出土遺物



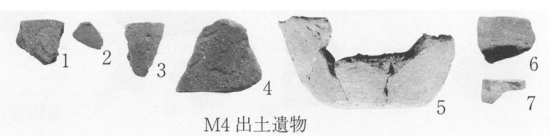
M2 出土遺物



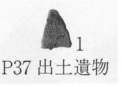
1

2

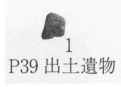
M3 出土遺物



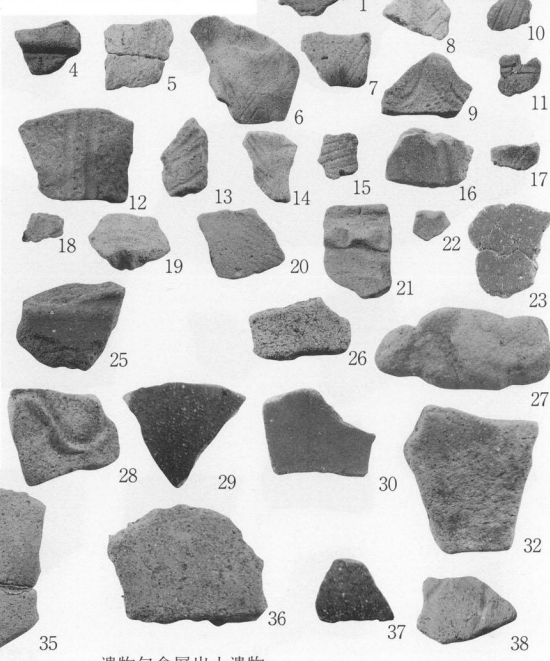
M4 出土遺物



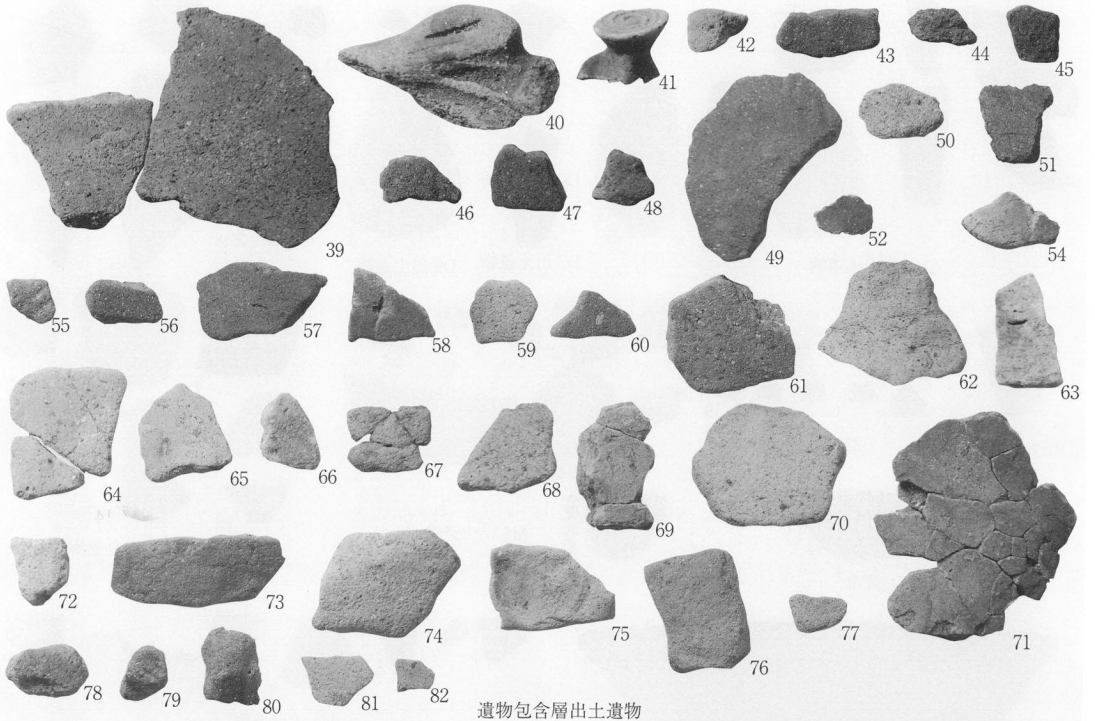
P37 出土遺物



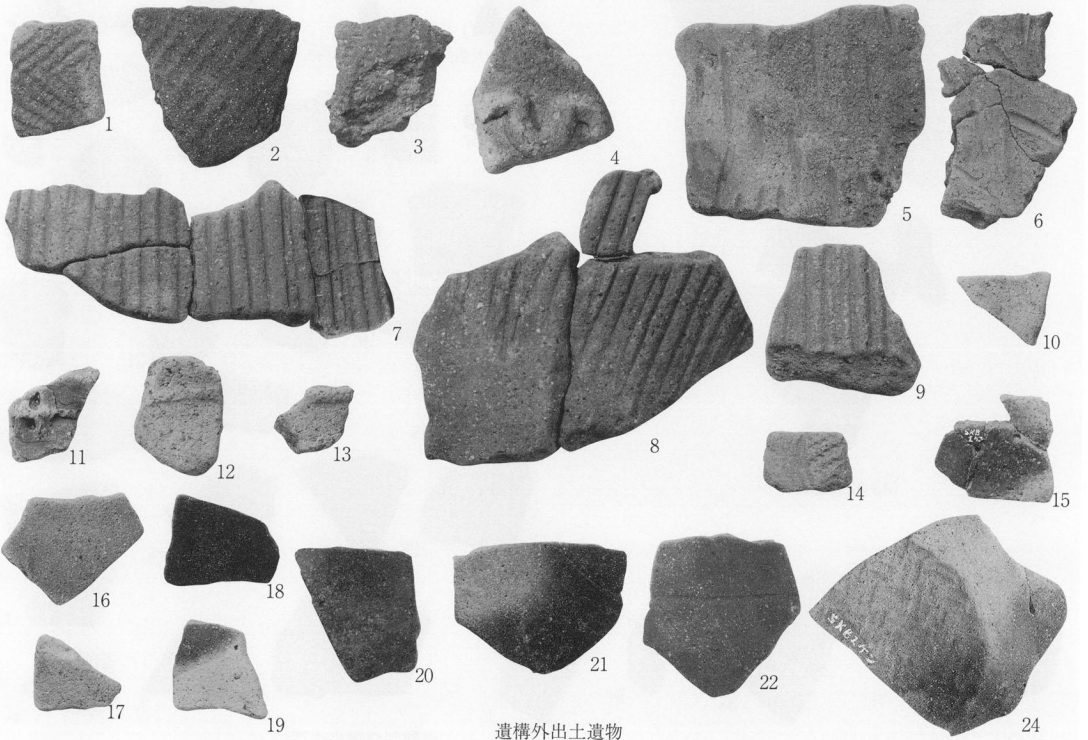
P39 出土遺物



遺物包含層出土遺物

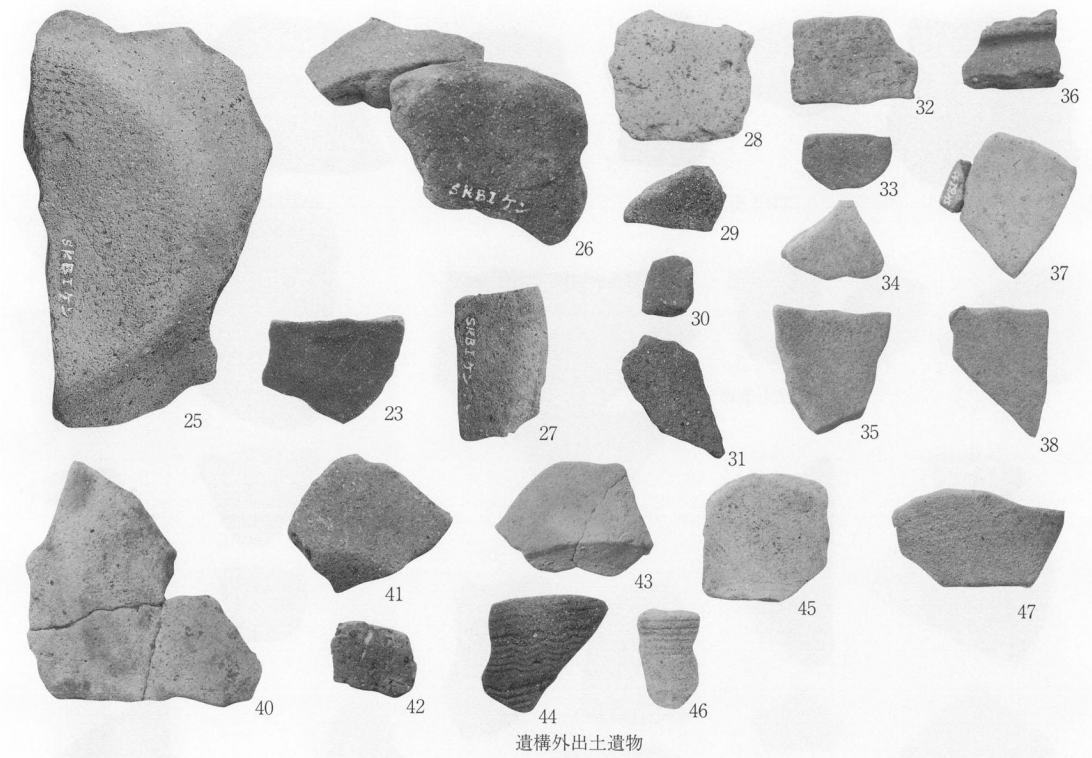


遺物包含層出土遺物



遺構外出土遺物

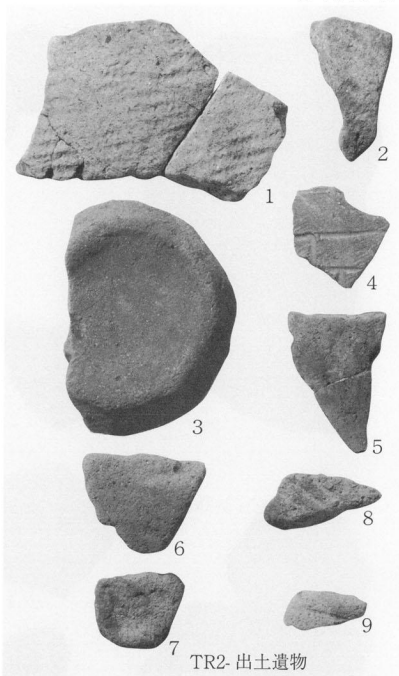
SKBI



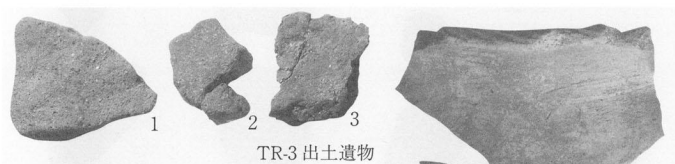
SKBI



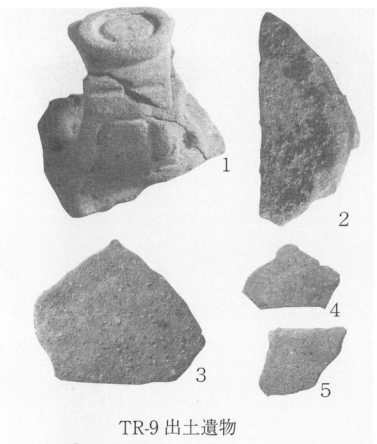
TR-1 出土遺物



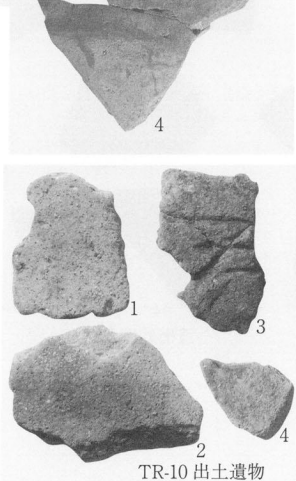
TR2- 出土遺物



TR-3 出土遺物



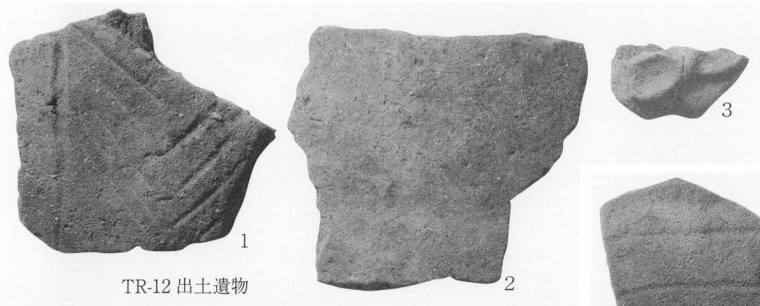
TR-9 出土遺物



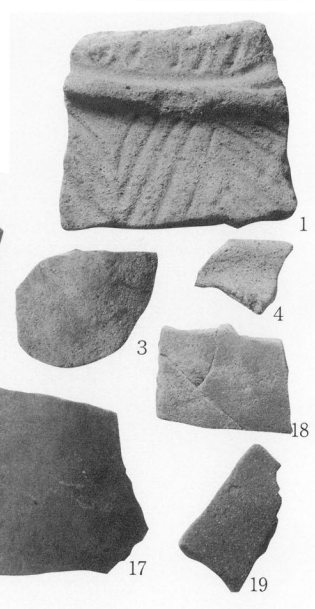
TR-10 出土遺物



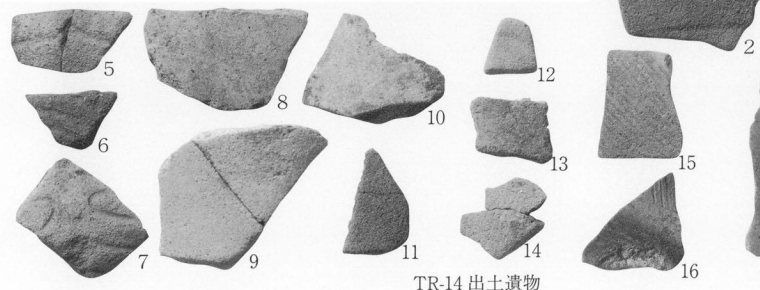
TR-11 出土遺物



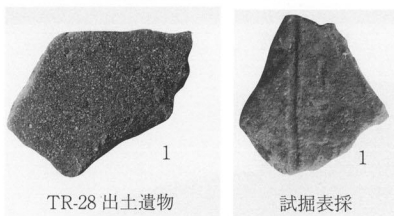
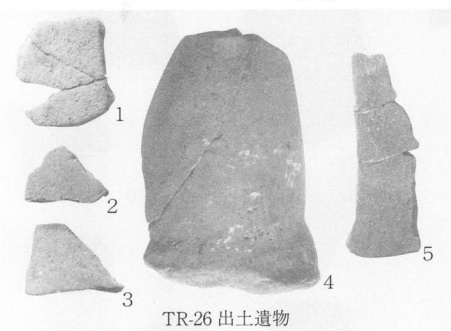
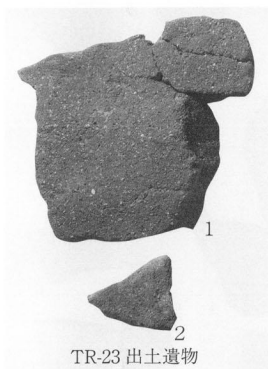
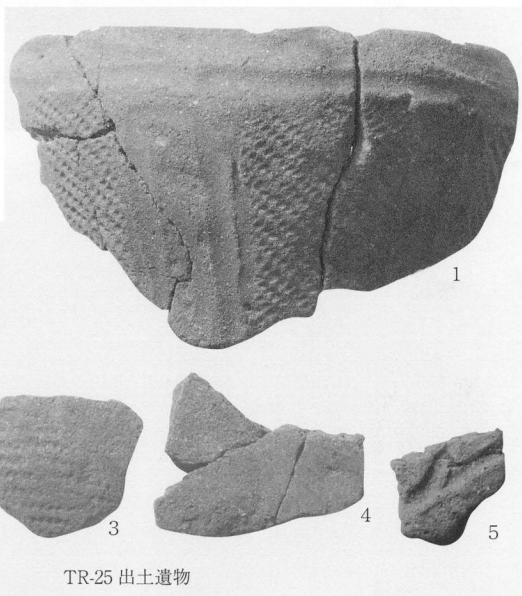
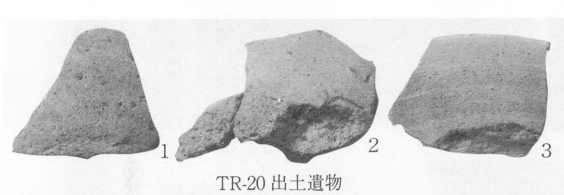
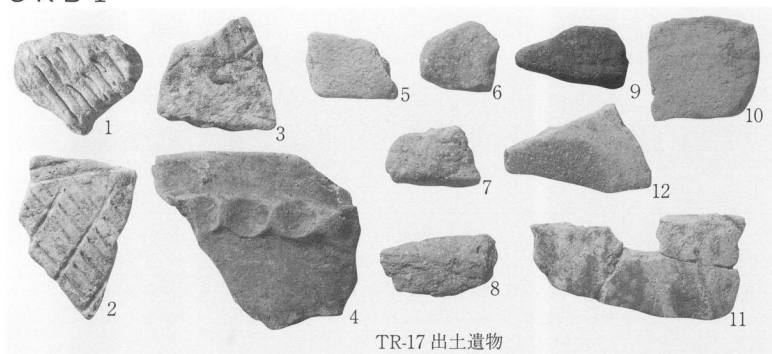
TR-12 出土遺物



TR-14 出土遺物



SKBI





D 1号土坑



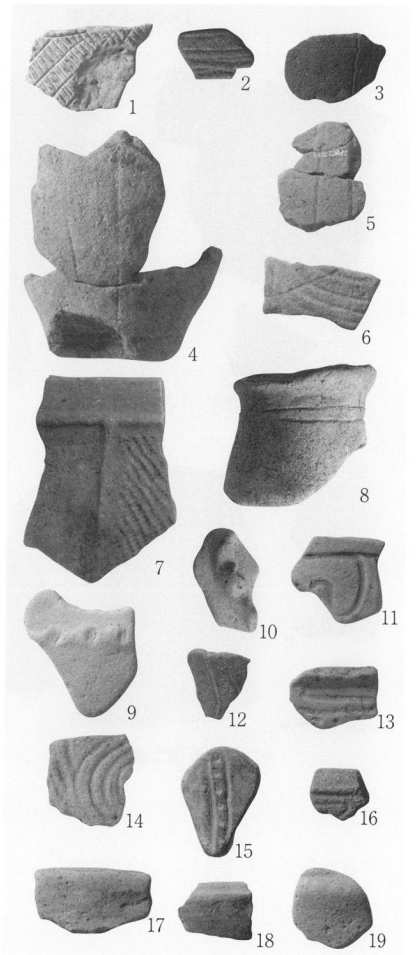
D 2号土坑



D 3号土坑

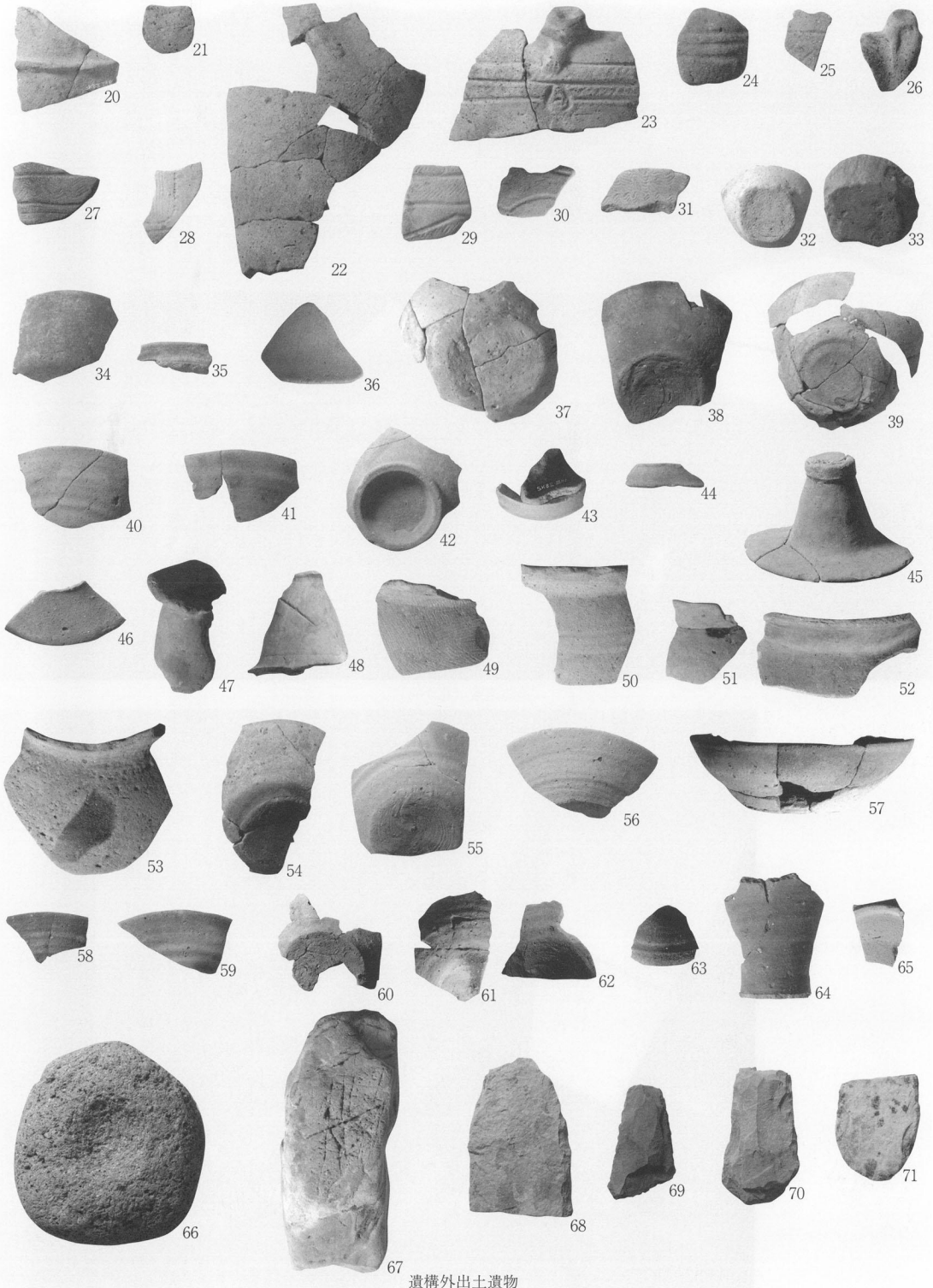


D 3出土遺物



遺構外出土遺物

SKB II



遺構外出土遺物

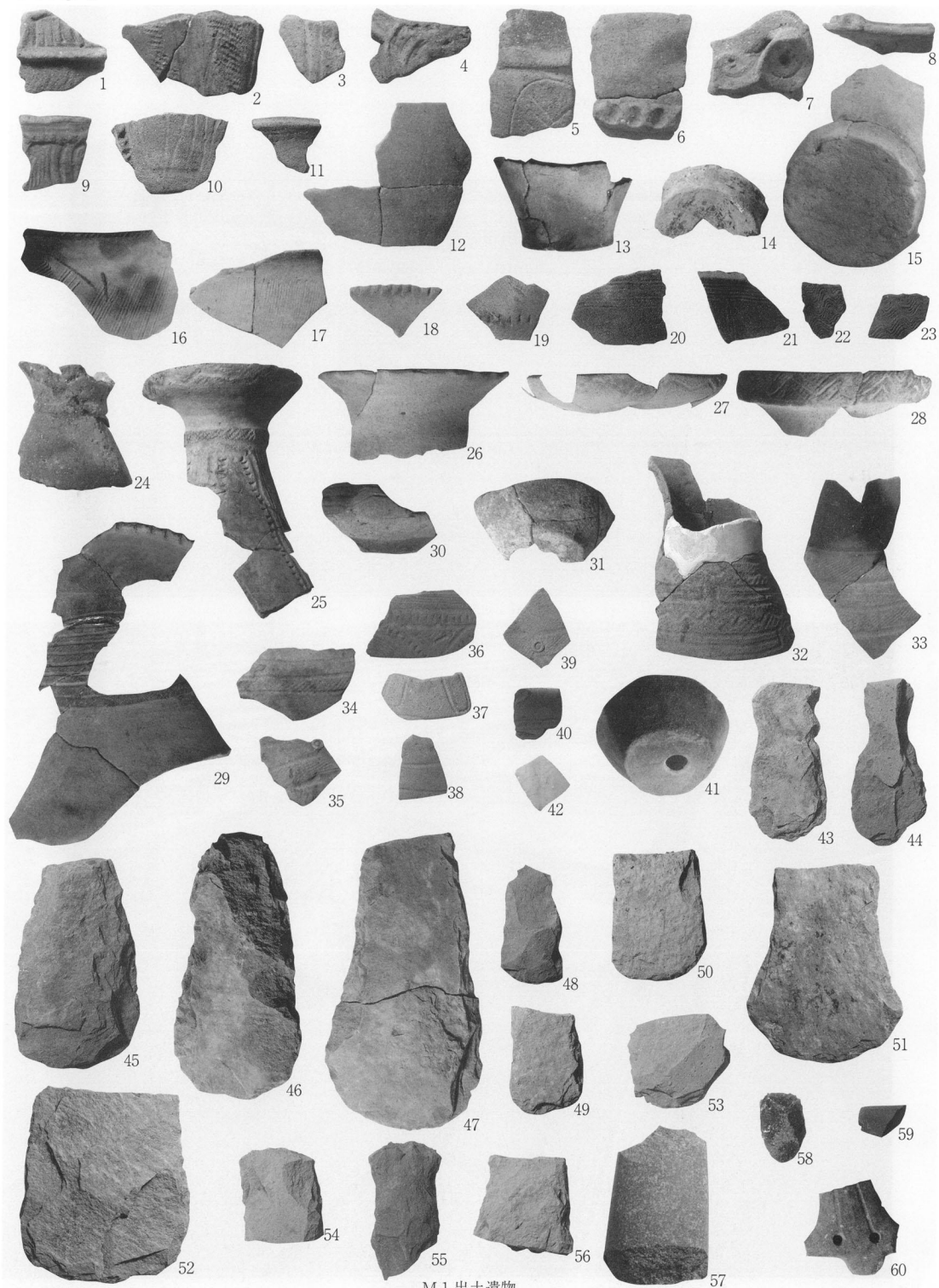


遺跡遠景（北から）

遺跡遠景（上から）



TKUI



M1 出土遺物



M1 近景 (南東から)



M1 遠景 (北西から)

TKUI



北裏遺跡Ⅰ周辺空中写真（株）こうそく撮影

報告書抄録

ふりがな 書名	きたはたいせき きたうらいせき 北畑遺跡 I・II 北裏遺跡 I
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書シリーズ番号 第155集
編集者名	小林眞寿
編集機関	佐久市教育委員会
発行機関	佐久市教育委員会
発行年月日	20080331
郵便番号	385-0006
電話番号	0267-68-7321
住所	長野県佐久市志賀5953
ふりがな 遺跡名	きたはたいせき きたうらいせき 北畑遺跡 (SKB) I・II 北裏遺跡 (TKU) I
ふりがな 遺跡所在地	ながのけんさくしさくらい・ともの 長野県佐久市桜井・伴野
遺跡番号	321・318
北緯	36, 14, 22
東経	139, 48, 13
調査期間	20051003-20080331
調査面積	7,070 m ²
調査原因	中部横断自動車道佐久南 IC (仮称) 建設事業
種別	散布地・集落址
主な時代 遺跡概要	縄文時代中期・後期／弥生時代中期／古墳時代中期／平安時代 遺構—土坑 24 基 (縄・平)、P i t - 72 (縄・平)、溝址—5 (縄・弥・平) 遺物—縄文土器 (前・中・後)、弥生土器 (中・後)、土師器 (古・平) 須恵器 (古・平)、灰釉陶器、石器、石製品
特記事項	石戈が出土

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第155集

北畑遺跡群 北畑遺跡 I・II 北裏遺跡群 北裏遺跡 I

2008年3月

編集・発行 佐久市教育委員会

〒385-8501 長野県佐久市中込 3056

文化財課

〒385-0006 佐久市志賀 5953

TEL 0267-68-7321

印刷所 株式会社 ダンバラ印刷
